
魔法少女リリカルなのはStrikers ~ 誰もが願いし平和 ~

Rewrite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 誰もが願いし平和

【Nコード】

N7508W

【作者名】

Rewrite

【あらすじ】

歴史。それは、人が何かを起こした結果を忘れずに残すものだと思う。人が世界を変えた時代。人が英雄と呼ばれた時代。人が世界を救った時代。人が進化した時代。人が人になった時代。人が人になる前の時代。だが、その前にも時代があった。神話時代。これは、その神話の力と名を持つ少年と少女物語。彼らは機動六課の魔導士と出会い、触れ合い、学んでいく。本物の平和とは？ その答えを……。神話の名と技と武器を持つ彼らが作り出す。誰もが願いし平和。

和
とは？

作者初作品となりますので、誤字脱字が目立つと思いますが、皆さんの感想で、徐々に変えていきます。ですので、見たら感想をお願いします。

プロローグ

空に、一人の少年が飛んでいた。

右手には蒼いすらつとした刀を持つその少年は、背後に迫る10人程の杖を持つ魔導士達に追われていた。

???「はあ、はあ、はあ・・・まだ来るか・・・彼らは」

彼はこれ以上逃げて体力を使うのも無意味と判断し、背後から迫る彼らの方を向いた。

そして刀を構えると、刀から蒼い魔力光が流れ出て、刀に纏った。

???「これ以上・・・誰も殺したくないのに・・・すまない」

彼の瞳からこぼれ落ちる滴・・・

それにすら気づかない魔導士達は、杖に魔力を集め始めた。

魔力を集めて放つ魔法を、『ブレイカー集束砲』と呼ぶ。

彼らが使うのはその集束砲だ。

そして魔導士達は、彼に砲撃を放った。

そして彼に直撃し、大爆発が起こった。

「????」やっぱり・・・“魔法”では、私を殺す事も・・・傷を負
わせる事もできないか・・・」

魔導士「!?!」

彼は無傷のまま、煙から出てきた。

そして彼の刀は、蒼い閃光を放った。

「???」エクスカリバー!!」

そして蒼き閃光は10人も魔導士を消し飛ばし、そのまま閃光は地上の空港に直撃した。

「???」しまった・・・空港にまで、当ててしまったようだ・・・」

すると蒼き刀は点滅しながら話し出した。

？「分かっていたんじゃないの？それとも、こうなったとしてもどうにかできると思ってたの？」

女性の声が、彼の耳に聞こえる。

「????」どうにか・・・か。この状況を作ったのは私の責任だ。どうにかするよ。力を貸してくれ」

？「言われなくても。私は貴方の相棒ですもの。 オーディン」

そしてオーディンと呼ばれた彼は、火災が発生した空港に向かっていった。

後にこの空港での爆発事件は時を経て、『遺失物管理部機動六課』
の設立に繋がり、この空港火災の被害者の一人 スバル・ナ
カジマの人生を変えるきっかけとなったのだった。

プロローグ（後書き）

えっと、皆さん初めまして。作者の Rewrite です。

一応説明しますが、先ほどオーティンと呼ばれた主人公の彼が使ったエクスカリバーですが、fateシリーズのあれと考えてください。ですが原作はそれではございません。それでは感想を皆さん、これからお願いいたします。

出会いと再会は、偶然と必然の二つと決まってる

時は流れ、JS事件終結後。

機動六課では、FWと呼ばれる新人チームの4人がいた。

その4人は管理局の白い悪魔と呼ばれる程の実力者『高町なのは』と鉄槌の騎士と呼ばれる『ヴィータ』の2名と訓練をし、ボロボロになって地面にだらっつとしていた。

青い髪の少女が『スバル・ナカジマ』

オレンジ色の髪の少女が『ティアナ・ランスター』

ピンク色の小さな少女が『キャロル・ルシエ』

赤髪の小さな少年が『エリオ・モンディアル』

全員「はあ、はあ、はあ、はあ……」

ヴィータ「だらしねえなあ……まだ慣れねえか？」

この訓練と言う名の地獄は4月から行われてきた。

現在は11月。

そろそろ慣れたらどうだと思つのもわかるが、この訓練が中々辛い

らしく、いつまで経っても慣れないらしい。

なのは「それじゃ今日はここまでで、お昼休みが終わったらまたここに集合ね」

全員「はい！」

そう言ってFWの皆は機動六課の中に戻っていく。

高町なのはとヴィータの2名はすぐには戻らず、午後の訓練の内容について話をしていた。

そして話は機動六課内でシャワーを浴び終え、食堂に集まったFWの4人になる。

話題は小さなことから。

スバル「気づけばもう11月だねえ」

ティアナ「そうね。このままだと、来年まであっという間よ」

キャロ「皆さんと一緒にいられるのも、あと少しなんですネ」

エリオ「楽しかった時間ですから、より一層ですよネ」

そう。この機動六課は1年間だけしか活動できない。

創立したのが今年の4月。

つまり終了は来年の4月。

後5ヶ月と無い。

ティアナ「皆も将来が決まってきたしね。後は最後まで何事もなく終わってくれば良いわね」

全員「確かに・・・」

機動六課は過去に「JS事件」と呼ばれる巨大な事件を経験している。

この事件をきっかけに、事件の数が増える可能性がある。

出来れば何事も無くと言うのが理想らしい。

【緊急連絡。 緊急連絡】

FW「!？」

だが、現実はそうは行かない。

事件発生のアラートが機動六課に流れた。

それを聞いたFWの4人は食事を止めて屋上に向かった。

屋上にはへりがある。

FWの皆と、高町なのは達はそれに乗り現場に移動する。

彼女達はへりに乗り、現場に移動した。

ヘリの中にはパイロットのヴァイス陸曹。高町なのは、ヴィータ、フエイト・T・ハラオウン、シグナムスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、キャロル・ルシエ、エリオ・モンディアルが乗っていた

高町なのはとフエイト・T・ハラオウンの2名が事件の概要の説明を始めた。

なのは「現場は廃墟ビルがいくつもある場所なんだけど、そこで強力な魔力反応があったの」

フエイト「もしかしたら別の隊の人たちが動いているかもしれないから、判断に気を付けて。そして私達がすることは『現場調査』と『犯人確保』そして『被害者捜索』の3つ。犯人確保は基本的には私達隊長や副隊長の仕事だから皆は現場調査と被害者捜索の方をお願いね」

FW「はい！」

気合のある返事。

そして現場に向かう。

ただ一人、とある感覚を持った少女がいた。

青い髪をした、スバル・ナカジマである。

スバル「（どうしてだろう・・・この感覚。凄く懐かしい感覚がする・・・確か“あの時”の感覚）」

あの時・・・それは、空港火災事件。

過去にスバルは姉である「ギンガ・ナカジマ」とはぐれ、その間に火災が発生。

空港ないに閉じ込められ、生死のギリギリをさまよった事があった。

その時、一人の少年にスバルは助けられたのだ。

空港火災事件の日。

スバル「ギン・・・姉え・・・どこお・・・」

火の海の中にいる小さな頃のスバル。

その頃は魔法なんて全く出来ず、ただの普通の学生。

そんな子が火の海から生き残るのは不可能。

だからこそスバルは、心の底から願った。

この絶望的な状況から、脱出することができる道を

スバル「誰か・・・誰か、助けてよお！！！！」

空に向かって叫ぶ、その声

そして天井から落下してくる崩落した壁。

この死が、彼女の動きを止めた。

もう 諦めるしかないのだと・・・

『諦めるな。奇跡とは、諦めなかった者に現れるから奇跡なんだ』

スバル「え・・・」

そして聞こえた、一人の男性の、その声

??? 「エクス・・・カリバー!!!!!!」

スバル「!?!」

蒼き閃光が、彼女に迫る岩を破壊した。

??? 「大丈夫か？」

私に声をかけたのは、蒼い短髪で黒いBJを着た少年。

スバル「は・・・はい。大丈夫・・・です」

??? 「そうか・・・すまなかった。私のせいでこんなことに・・・
とにかく、ここに近づくと魔導士がいるようだから、その人に救って
もらおうといい」

そう言って彼は飛びだとうとしていた。

スバル「待ってください！名前は・・・？」

そう聞くと、彼はこう言って去った。

「??？」

オーディン

「

回想終了

スバル「（あの人と・・・同じ感覚が近づいてきている気がする）」
そんな感覚を持ちながら、彼女らは現場にたどり着いた。

なのは「それじゃみんな、搜索を開始して」

FW「はい！」

そう言ってスバル達はなのは達と別れて行動を開始した。

そして 一方。

???「・・・また、こんな状況か」

蒼い短髪ですらっとした蒼い魔力光を纏った刀を持つ少年は、廃墟ビルの影に隠れていた。

近くを飛び回る、魔導士たち。

彼はその集団から逃げているのだ。

?「まだ彼らは、あなたを殺すつもりらしいわね」

蒼き刀は点滅しながら話してきた。

???「ああ。どのみち戦わないといけないみたいだな・・・!誰か来る!」

彼は立ち上がり、刀を構えた。

そして現れたのは、4人の少年少女達。

そう。機動六課のFWである。

スバル「え……」

「?..?」

これが、二人の再開となることになる。

再会、戦い、そして・・・（前書き）

・・・なんでかな？

眠い。でも眠れない。だから小説を作る。

・・・眠い・・・

再会、戦い、そして・・・

スバル「あ・・・あなたは・・・」

????「君は・・・確か・・・あの時の」

二人は再会した。

FWの3人は分らないらしい。

それも当然というものですが。

スバル「ここで・・・何してるんですか？」

????「君に話すことじゃない。それに、これは“私達”の問題だ。君は関係ない」

そう言つて少年はスバル達から別れようとした。

魔導士「見つけたぞ！」

????「くっ!?!」

少年は魔導士に見つかり、大きく上空に羽ばたいた。

スバル「あ、待ってください!!!」

スバルの声を聞くことは無く、少年は羽ばたき、10人ほどの魔導士達から逃げていった。

そしてその光景を見た空戦魔導士でもある高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、シグナム、ヴィータの4人も追跡を開始した。

スバル「何で……」

ティアナ「スバル……あなた、あの人のこと……知ってるの？」

スバル「うん……大切な、記憶なんだ」

そうやってスバル達はなのは達の指示通り、現場調査と被害者捜索をしながら空港火災の日の話しをした。

そして高町なのは達は、魔導士と少年を追っていた。

なのは「フェイトちゃん。あの部隊……どこの？」

フェイト「分からない。あんな陣形をとる隊なんて……見たこと
ないよ」

基本的に部隊の動きは決まっている。

それは陣形もまた同じ。

そして一人の相手を追う時の人数は4人が普通。

さらに10人いる場合は仲間同士の攻撃があたったりしないために一定に決められた陣形をとるように決められている。

だが蒼い刀を持った少年を追う魔導士達の陣形は、陣形と呼ぶには相応しくない。

それはただの集団での追いかけてこた。

つまり彼らは管理局の者でも無ければ、地上本部の者でもない。

別の勢力か何かと考えるのが自然だ。

となれば今しなければいけないのは、追われている彼の救出。

そう考えたなのは達はさっそく行動した。

なのは「アクセルシューター!!!」

フェイト「プラズマランサー・・・」

なのははピンク色の魔力で出来た弾丸。

フェイトは黄色の魔力で出来た雷の矢。

なのは「シュート!!」

フェイト「ファイアー!!」

2人はそれを放った。

魔導士「!?!プロテクション!」

魔導士の全員はなのはとフェイトの攻撃に反応し、シールドを張って防御した。

シグナム「はああああ!!!!」

ヴィータ「おらああああ!!!!」

シグナムとヴィータはその隙に背後から魔導士達を攻撃した。

魔導士「ぐあー!!」

そして全員を撃墜させた。

「???」・・・すごい・・・」

逃げていた彼は足を止め、その光景を見ていた。

なのは「君は？」

「???」・・・」

彼は質問には答えず、刀を構えた。

フェイト「待つて！私達は、あなたと戦う意思は無いの。話しを聞かせてもらえるといいんだけど？」

「???」話すこと・・・か。出来れば、私達には関わらないで欲しい・・・それだけだ」

そう言うて去ろうとした少年。

シグナム「待つて！」

「!?」

突如、金属がぶつかり合う音が響きわたった。

少年の刀とシグナムの刀がぶつかりあったのだ。

シグナム「貴様・・・何も話さずに去ろうとは良い度胸だな」

「!?」別に。ただ私達は・・・余計に人を巻き込みたくないだけだ」

シグナム「余計・・・か。私達のような存在は余計なのか？」

その言葉に彼は少し表情を変えた。

「!?」・・・どう、だろうな。今は・・・何も分からない。でも私達は手にしたい夢があるんだ」

シグナム「夢・・・だと？」

いきなり子供地味な事を言い出した。

「!?」私達は、
誰もが良いし平和
を手に入れた
い」

シグナム「？なんだ・・・それは？」

「???」「詳しい話を話す義務は無い。話したところであなたがたには、何もできないからな」

シグナム「ずいぶんと上から目線だな。ならば、試してみるか！！」

そう言うとシグナムはぶつかりあったままの刀を押しした。

「???」「・・・出来れば、無駄な殺生は避けたいんだが・・・仕方ない・・・のか」

そう言うと少年はシグナムから距離をとり、刀を構えた。

シグナム「私の名はシグナム。そして私の武器は炎の魔剣『レヴァンティン』」

「???」「何・・・レヴァンティンだと!？」

その名前に彼は驚いた。

シグナム「？知っているのか？」

「????」・・・その名を、お前なんか呼んでいいと思っなよ・・・
行くぞ『グラム』」

そう呼ばれた蒼き刀は、素直に答えた。

グラム「はい。オーディン」

シグナム「!？」

シグナムはもちろん、なのは達でさえ、少年の呼び名に驚いた。

オーディン

最高神と呼ばれる程有名な神話に登場する神の一人である。

そしてグラムは、オーディンが使われたとされる刀。

シグナム「貴様・・・一体何者だ？」

????「・・・オーデイン」

そう言つて彼はシグナムに切りかかつていった。

シグナム「!？」

シグナムは驚きながらも、ギリギリで反応し、彼の斬撃を受け止めた。

シグナム「貴様・・・真実は、私が勝つたら説明してもらおう！」

????「私は負けない。例え相手が・・・レヴァンティン・・・レ
ーヴァティンの名を持つ刀だとしてもな」

そう言つて彼はシグナムから離れ、刀を振り上げて魔力を込めた。

シグナム「ふ・・・一騎打ちか。良いだろう」

そう言ってシグナムはレヴァンティンを鞘に収めた。

そして二人は、同時に放った。

??? 「エクスカリバー!!!!!!」

シグナム「飛竜一閃!!!!!!」

二つの斬撃はぶつかりあった。

シグナム「ぐうううう!!!!!!」

シグナムの攻撃が徐々に押され、あと少しでシグナムが負ける。

スバル「止めてください!!!」

???「!?!」

だが、当たる直前で、彼は攻撃を止めた。

スバルがそこにいたからだ。

???「・・・」

少年は刀を納めた。

シグナム「・・・何故止めを刺さなかった?」

「……止められたから。それと、私の責任だからだ」

そう言っつて少年は刀をしまった。

そして地面に着地し、スバルの前に来た。

「……久しぶりだな。さっきは、君の先輩達に助けられた。だから……話してやるよ」

そう言っつとスバルの頬は若干赤くなり、そして満面の笑で言った。

スバル「はい！！私は、スバル・ナカジマです！あなたは！？」

真道「真道創世まごのつくよ。またの名をオーディン。宜しく」

そして彼は、スバル達と共に機動六課へ向かう。

主人公設定

真道 創世 (しんどう そうせい) 年齢18歳 身長175cm

別名『オーデイン』

魔力ランクEX(測定不能)

魔緑色「蒼・黄金・紅」

武器^{デバイス} 「グラム」 CV・青葉りんご

武器性能 モードを変える事が可能。

1、刀 蒼い刀であり、日本刀に近い。

2、槍 紅い槍。モンスターハンターの老山龍の紅槍と同じ。

3、剣 西洋剣。黒い鞘に入っており、抜くと黄金に輝く剣へと変わる。

魔術形式 神話式(ミッド式でも無く、ベルカ式でもない。神話に用いられた武器や技などを使う)

希少能力『ニールベルグの指環』これにより、以下4つの能力を使用可能になる。

序夜『ラインの黄金』神話に登場する全ての武器と技を使用するこ

とができるようになる。ただし発動後から次の武器を出すには2時間40分かかる。

第1日『ワルキューレ』自らの身体能力を極限まで上昇させることができる。これにより、自らの体力の回復が異常なまでに速くなる。ただし発動後3時間50分経ったら能力は終わり、その後3時間50分経たない限り発動できない。

第2日『ジークフリート』仲間の魔法を発動することができる。これにより、何人も技を組み合わせの使用ができる。ただし発動後4時間は使用できない。

第3日『神々の黄昏』全ての中で最も単純な魔法。この魔法の発動により4時間30分は単純な魔法を使うことができる。発動される単純な魔法はその時その時によって違う。

技 武器での技なので、希少能力で発動する技では無い。ただし、希少能力でも発動できる。

・『エクスカリバー全てを斬り裂く刀』刀に込めた魔力を閃光として放つ。単純かつ最強の一閃であり、その放たれた閃光はあらゆるものを切り裂くことができる。ただし魔法による物、デバイスやBJは切り裂くことが出来ない。

・『テイルウィング黄金色の聖約』剣で放つ。あらゆる状態異常系統の魔法を無力化させ、相手の持つ魔法による効果すらも断ち切る。距離の概念すらも断ち切るので、事実上回避も不可能となっている。ただし使えるのは3度までとなり3度目の一撃を放つと刀身が耐え切れない。

・『勝利をもたらず紅槍』グングニル 槍で放つ。強力な一撃であり、真正面からぶつかり合えば必ず勝利する。ただし必ずと言う結果は正面限定であり、左右でぶつかりあっただけでは必ずという結果はなくなる。ただし槍技の中で一番威力が高い為、左右で当たったとしても基本的に負けることはない。

・『戦死者を選定する者』ヴァルキューリ 刀に魔力を込め、高速で動き分身を作つて敵を混乱させて切り裂く。分身と使用者のステータスは同じの為、同じ威力の斬撃が襲いかかる。ただし発動後数時間は分身が消えない。分身が覚えた事は使用者の記憶の一部となる。

・『心の臓を喰らうもの』ゲイ・ボルグ 槍の先を狼の顔に変え、相手の心臓・リンカーコアのどちらかを喰らうことができる。ただしこの技は一人の相手に一度しか使用できない。この技は非殺傷設定完全無視なので危険な技になるので、真道はあまり使わない。この技で喰らった場所によって以下の能力を得る。

『心臓』 自らの身体能力を上昇させ、寿命を少しだが伸ばす事ができる。

『リンカーコア』 自らの魔力量を増やす。または回復させる。

・『破壊神の三ツ又槍』トリシュコーラ 槍に魔力を込めることで三ツ又の槍となり、放つ閃光は前方にある全てを破壊する。ただし発動に使用する魔力量が多い為、使うことができるのは希少能力を使わない限り一度しか放てない。更に前方まっすぐのみの破壊のため、攻撃範囲がとても小さい。

・ 『稲妻貫く灼熱の槍』^{フリーナク} 槍で放つ強力の技。必ず貫く技であり、切っ先から放たれる光は一度に5人まで当てる事が可能で外すことはない。ただし、この攻撃を耐えることは可能。

・ 『穢れなき炎の聖剣』^{レーヴァテイン} 剣で放つ最強の技であり、その攻撃は世界を破壊できる程の威力がある単純な魔法。ただし自身の身を滅ぼさない様に威力は最大でも7割弱までしか出せない。それでも放てば一つの都市は軽々しく燃やし尽くしてみせる。さらにこの技は威力が高い故に魔力消費がとても激しい為、多用はできない。

容姿 髪型はさっぱりとした黒の短髪。少しボサボサとしているが、これは別に寝癖ではない。肌は少し焼けている。服装は黒いシャツに青いジーンズ。BJもこれと変わらない。

性格

- ・ 大抵の事は自分でやる。
- ・ 考え事をするときに髪の毛を弄る癖がある。
- ・ 正義感溢れている。
- ・ 優しいが本人の自覚はない。

- ・女性には強く当たれないフェミニスト
- ・一度『決断』したことは梃子でも曲げない。
- ・他人の『決断』も、たとえ衝突しようとも尊重はする。
- ・頭の回転が速く、たまに皆を驚かせる様な奇策を考える。
- ・はっきりとしている。
- ・責任感が強い。

主人公設定（後書き）

いくつか変更点があると思いますが、取り合えずこんな感じですよ。

3人の神（前書き）

前回の設定情報から早くも4人の先生に感想を頂いております。ありがとうございます。

できる限り更新は早くしたいです。よろしくお願いします。

3人の神

場所は変わって機動六課の待合室。

そこに真道とスバルは二人だけで椅子に座り話していた。

真道「まさかあの時の君と再会することになるなんてな」

スバル「私も驚きました。あの時助けられてから、ずっと会いたかったんです」

真道「そうか……。あの時はすまなかったな。あの空港火災の原因は私にあるんだ」

スバル「え？」

突然の事実にもスバルは間抜けな返事をした。

真道「実はあの時、私はさっきと同じ魔導士達に追われててな。そして技を使った時にそれが空港に当たってしまったんだ。すまなかった」

そう言っつて頭を深くさげた。

スバル「い、いえ！私は無事でしたし、私の姉も無事でしたから。真道さんが助けてくれたから」

真道「そうか……。それは良かった」

スバル「はい。あの時は・・・本当にありがとうございました。真道さんに助けられたあの日から、私は魔法の世界に入ろうって思ってたんです」

真道「・・・そうか。ならば、頑張れ。希望を捨てるなよ」

スバル「・・・はい！」

そしてそれからしばらくして真道はなのはとフェイトの2名に案内され、部隊長室に向かった。

はやて「私はこの機動六課の部隊長をしている八神はやてです」

真道「私は真道創世。それで、何が聞きたい？」

先ほどのスバルとの会話の態度とは変わり、厳しい様な表情と声で聞いた。

はやて「まず一つ目。君を追っていたあの魔導士は何や？」

真道「あいつらは犯罪組織の類の者達だ。私はその調査に来んだが見つかってしまったな。無益な殺生はあまり好まないから逃げた。そこで貴方がたが来たと言ったことだ」

はやて「……どんな犯罪や？」

真道「彼らは奴隷を売っている。まあ裏社会の人間だ」

フェイト「奴隷……売買……」

フェイトは誰よりも敏感に反応した。

それは、彼女が執務官であり、過去に奴隷に近いことをされていたからこそである。

真道「奴隷売買は気づいたらすぐに解決させないと、被害者とれいの心の傷が深くなっていく。だから私は通報する前に行動したんだ」

フェイト「そんな……私達はすぐに動くよ!？」

真道「……そう言って、助かるのが“一足遅かった”とか“惜しかった”とか言う光景を私たちは今まで……何度も……何度も

見てきた。それで信じると?」

フェイト「っ!?!」

そう言われてフェイトは苦しい表情をした。

真道の言うことはその通りであり、TVなどで事件によって出た被害者に対して“一足遅かった”や“惜しかった”などと言う発言はよく聞く。

そんな言い訳を言う執務官達を信用して通報して待っているなんて・・・できないに決まっている。

それが、正義感の強い人なら尚更である。

真道「私は・・・私達は、誰よりも速く助ける。それが例え、間違っている行動だとしても」

はやて「・・・さつきから気になっとなんたんやけど、俺“達”って事は、他にも仲間がいるんか?」

真道「ああ。私には後二人の仲間がいる。呼んだほうがいいか?」

なのは「出来るの?」

真道「大丈夫だろう。ただし、私達の事は他言無用が条件だ」

はやて「うん。別に真道君たちは犯罪をしたわけやないし、特に外

部に漏らすことはないよ」

真道「分かった」

そう言つと真道はポケットから携帯を取り出して誰かに連絡をとつた。

真道「・・・もしもし？私だ。今から私のいる場所に来てもらいたい。安心しろ、敵じゃない。ああ。それじゃすぐに来てくれ。じゃ」

そう言つて彼は携帯をしまった。

真道「少し待つて欲しい。その間は少し、私のデバイスについて説明しておく。どうせそれが一番気になってたんだろ？」

そう聞くと皆はビクツと反応する。

真道は「やはり・・・」と納得したようすで話しを進めた。

真道「私の使っている武器・・・「グラム」は神話の名を持つ武器。そして私の能力と技も、神話系のものなんだ。だから魔術形式はベール力でもミッドでもない『神話式』と私達は呼んでる」

はやて「神話・・・式かあ・・・」

皆は関心した様子でした。

真道「私のもう一つ名が「オーデイン」の理由はそこにある。そして私の仲間『ロキ』と『トール』今からここに向かっているが、その2人も神話式の魔導士だ」

なのは「魔力ランクは、どれくらいあるの？」

真道「さあ？私達は魔力ランク非保有だからな。まあ別にそんなもの、あつたところで何の意味もないからな」

シグナム「？何の意味がない・・・だと？」

真道の発言にシグナムが反応した。

真道「ああ。そんなものがあつて、何になる？仕事で上下が付くだけだろ？『世界を平等に』ってのが皆の考えなくせして魔力ランクなんか作つてお互いの優劣を作ってしまうなんておかしいだろ？」

全員「・・・」

真道のそのはつきりとした意見に、全員は何も言えなかった。

彼が納得できる説明なんて出来るのか？

もし出来たとして、それは説明なのか？

言い訳になるだけなのではないか？

そう考えれば、何も言えない。

真道「私は、そんな非情な世界が嫌いだ。そんな現実・・・私達が全部ぶち壊してやる」

全員「!？」

その瞬間、真道の周りの空気がピリつとした緊張感が漂い、なのは達はデバイスを構える用意をした。

真道「・・・さて、私の話しは後一つ」

そう言うと彼は緊張感を解くかのように表情を和らげた。

真道「スバル・ナカジマ。あいつは・・・絶対を守る」

全員「？」

なのは「どうして・・・スバルなの？」

真道の突然の発言に、皆はなのはの質問と同じことを考えた。

真道「・・・過去に私は、スバルの命を危険に晒したことがある。だからその責任を取るために、必ずスバルを守る。だから、スバルが信じるお前らを・・・極力信じる」

そう言って真道ははやてに右手を差し伸べた。

真道「私、真道創世は八神はやて率いる機動六課の味方になることを誓う」

はやて「・・・ありがとうなあ」

そう言ってはやては彼の手を握り返した。

そして機動六課に、少年と少女の姿があった。

二人は六課に入ると、受付にて部隊長室の場所を教えてもらい、部隊長室に向かった。

???・???・??? 「失礼します」

そう言つて二人は部隊長室に入る。

はやて「いらつしゃい……え……え……」

なのは「え……」

シグナム「な……」

ヴィータ「なんで……」

二人が入るやいなや、なのは達は驚きの表情でいた。

真道「お、来たか。ロキ。トール」

ロキと呼ばれた少年は髪が青黒く、さっぱりとした短髪の少年。

ロキ「ああ。取り合えず来たが、こいつらは？」

真道「私の知り合いの仲間だ。敵じゃない」

ロキ「そうか。そんじゃ真名を教えても大丈夫だな」

トール「そうみたいだね！」

フェイト「な・・・何で・・・」

フェイトの表情は、まるで死んだ人を見ている様な感じだった。

フェイトと同じ金髪の髪でサイドポニー。

スタイルのよいその姿は、どこかしらフェイトを思わせる少女。

そしてフェイト達は、その少女に見覚えがあった。

蒼騎「俺は蒼騎零二^{あおき れいじ}。またの名を『ロキ』」

そしてフェイトそっくりの少女も、自らの名を名乗った。

アリシア「私はアリシア。またの名を『トール』だよ。よろしくね」

その名は、この世で既に死亡しており、フェイトの基となった少女であるアリシア・テストアロツサその者だった。

運命（フェイト）に導かれた二人（前書き）

トールを名乗る少女の名はアリシア。

アリシアの容姿は、フェイトの基となったアリシア・テストロッサ
その者です。

その理由がこの日、分かることになる。

Rewrite「こんな感じで今回も作ります。皆さんの感想お待ち
しています」

運命（フェイト）に導かれた二人

フェイト「アリシア……どうして……」

アリシア「？あなた……誰？」

フェイト「っ!？」

アリシアの答えにフェイトは苦しそうに下唇を噛んだ。

だが、アリシアがフェイトを知らないのは当然である。

何故ならアリシアが眠っている間にフェイトは生まれ、二人は会うことなく別れたのだから……

だが、アリシアは10年前、プレシア・テストロッサはアリシアを連れて去っていった。

そして死亡となったはずだった。

その彼女は今、トールの名を持ってフェイトのもとにいる。

なのは「アリシアちゃんって……死んだはずじゃ……」

真道「……アリシアを知ってるのか？」

蒼騎「お前ら……アリシアに関して知っていることを全て話しやがれ!……!」

全員「!?!」

先ほどまで優しそうな感じんでいた蒼騎が突如、逆鱗に触れたかのようになり怒りに満ちた声で叫んだ。

その一言は、大気を震わせるかの如く……それだけの思いがあることが分かる。

フェイト「……実は」

そしてフェイトは真道、蒼騎、アリシアの3人に10年前の「ジュエルシード事件」または「プレシア事件」と呼ばれる、なのはとフェイトの出会いの話をした。

内容はこんな感じである。

10年前、魔法文化が全く無い世界『地球』に住む、ごくごく普通様々なアニメの中でも一般生徒A辺のなのが自称であった平凡な小学3年生「高町なのは」。

彼女はほんの小さな事・・・小さな夢をきっかけに、フェレットだった「ユーノ・スクライア」と出会い、その出会いをきっかけに魔法少女になった。

魔法少女になったのはが行う事は危険なロストロギア『ジュエルシード』の回収。

その為に激しい戦いの果て、一人の少女と出会う。

金髪のツインテールの黒いマントを羽織った、悲しい瞳の少女。

そう。「フェイト・テストロッサ」その人である。

彼女は高町なのは達とは別の目的でジュエルシードを集めていた。

それを知らずにフェイトはジュエルシードを集めていた。

なのはとフェイトは、お互いの背負いし想いの為にぶつかりあった。

その果てに見えた真実。

フェイトは作られた存在だった。フェイトの基になった少女「アリシア・テストアロッサ」のコピーとしてフェイトは生まれた。

そしてジュエルシードを集める理由は、そのもとなった少女のアリシアを救うことだった。

アリシアはすでに助からない体で、既に死亡していた。

そのアリシアを救うためにフェイトの母親「プレシア・テストアロッサ」がとった行動こそ、フェイトにジュエルシードを集めることだった。

ジュエルシードの力を使い、アルハザードと呼ばれる世界に向かうと考えたのだ。

全ての真実を知り、世界に、自分自身に絶望したフェイト。

だが、フェイトは全てが終わった訳ではなかった。

手を差し伸べてくれた人がいた。

どんなことがあっても、どんな危険なことがあっても・・・フェイトに必死で手を差し伸べてくれた彼女・・・つい最近まで平凡な小学3年生であった高町なのはだ。

その結果、フェイトとなのはは本当の意味で友達となった。

だが、プレシアは自らの欲と、自らの無念さ、無力さの為に・・・アルハザードに行くことを変えなかった。

そしてプレシアは、あるかも分からない世界に向かって、アリシアと共に旅立った。

フェイト「こんな感じ・・・かな」

真道・蒼騎「・・・」

その事を聞いた真道は髪の毛を弄り、蒼騎はうつむいて考える。

なのは「だから、本当はアリシアちゃんがトールって呼ばれてるのも、今ここに立っていることも、私達・・・特に妹もフェイトちゃんっては驚くことなの」

真道「なるほどな。まさか・・・フェイトがアリシアの妹とはな・・・」

蒼騎「というか、アリシアが姉って事が一番驚きだ」

アリシア「ちょっと零ちゃん!?!?それどういづこと!?!?」

アリシアは頬をぶくつと膨らませて怒っていることをアピールしていた。

だが、童顔である故にその光景は中々可愛いものだったりする。

蒼騎「まあ、基本的にドジなアリシアの妹だ。ちゃんとしているだろうな」

話を逸らすようにそう言った。

フェイト「そ、そうかな？」

突如振られた話題にフェイトはなんとか対応する。

アリシア「ちょっと零ちゃん!!それも込みでどういこと〜!?!」

だが、冷静に対応できないアリシアを見れば、二人の違いは一目瞭然というところだ。

はやてと真道は苦笑いをする他なかった。

そして話しを戻し、今度はアリシアと真道と蒼騎の3人の出会いを話した。

真道「私達は、とある事件をきっかけに出会ったんだ」

10年前、真道創世は8歳。

その頃の真道は地球出身の、少々訳ありの少年だったりした。

真道創世の両親は真道が生まれてすぐに亡くなった。

そして彼は孤児院にあずけられていた。

その孤児院で真道は蒼騎零一と出会う。

蒼騎も真道と同じく、両親を生まれてすぐに亡くした、少々訳ありの少年だった。

二人はすぐに意気投合。

だが男同士であり、そして何よりお互いに色んな考えや欲があったため、何度も衝突する仲でもあった

簡単に言えば二人は喧嘩相手であり、親友であり、義兄弟でもあったということだ。

そしてしばらくして二人は、アリシアと出会うことになる。

理由は簡単。

真道と蒼騎は二人一つの部屋で寝ていた。

突如部屋が光だし、真道と蒼騎は別世界に飛ばされたのだ。

ありえない話だが、それは運命だった。

真道と蒼騎の二人が飛ばされた世界は、魔法が存在する世界。

クラナガンのとある公園だった。

飛ばされた二人の手元には身分証明書と現金（金額は内緒）と・・・
デバイスだった。

もちろん二人には何が何だか訳が分からなかった。

だが、問題はここから。

突如、二人の脳内にある情報が流れてきたのだ。

この世界は闇に満ちている。

正義と呼ばれる場所では、悪が存在し、皆が苦しんでいる。
幸せな日々は、不幸な日々を送らせているものがあるから
になっている。

そして犯罪は増え、それでも解決できない正義がある。

これにより、流れる涙。流れる血。流れる……現在^{いま}

これを止めることができるのは、3人。

オーデインの名を背負いし真道創世。

ロキの名を背負いし蒼騎零二。

そしてトールの名を背負いし少女。

真道創世。蒼騎零二。二名に問う。

二人は、この世界を……どうしたい？

突如流れる情報と、突如質問された二人。

だが、二人の答えは簡単だった。

真道・蒼騎「この世界を

救いたい」

二人は、流れてきた情報を信じて、悲しい現実を知ったからこそ、その道を選び、『決断』した。

ならば、二名に渡したそのデバイスを必ず使え。それは、お前らを真実へと誘いし力であるからな。

そう聞くと、俺達の目の前に一人の女の子が現れた。

それがアリシア。

アリシアを連れ二人は地図に従って自分たちの家に向かい、そこで生活を始めた。

自分たちの力を知り、鍛えていった。

アリシアはすぐに目覚めた。

だが、記憶がなかった。

まるで生まれたての少女だったのだ。

なんの知識も無い。赤ちゃんの様な彼女を二人は必死に育てた。

そして現在。

真道「私達のカ……神話式。そしてアリシアの出会い。これは、神の力に関係するんだ」

フェイト「そんな……」

真道「そしてこれは私の仮説だが、フェイト達のアリシアの話と私達のアリシアの話しを繋げるとすると、アリシアはプレシアって人と共に別世界に向かった。だがアリシアはトールの資格を持っていてそれに選ばれ、そして再びこの世界に戻ってきた……全てを失った状態で……」

蒼騎「……」

その仮説に、皆は納得した。

だが、それはとても悲しい仮説。

何故なら……プレシアが救われないからだ。

必死に……それこそ、フェイトの思いまでも無駄にさせてまで手にしようとした過去の日常。

結局プレシアは……何も救えず、何も得ることができなかったのか？

アリシア「あの・・・私は今の話し、よく分からなかったけど・・・
フェイトは、私の妹なの？」

フェイト「・・・」

フェイトは、答えに迷った。

確かに実際にフェイトはアリシアの妹だ。

だが、10年前に救うことが出来なかった事実が、フェイトを妹と
いう資格があるかないかを迷わせたのだ。

なのは・はやて「フェイトちゃんは、アリシアちゃんの妹だよ」

フェイト「!?!」

だが答えは、二人が答えた。

確かな自信を持って……

真道「……フェイト本人は、どうなんだ？」

フェイト「……」

フェイトは、なのはとはやての顔を見て判断した。

自分には、その資格があるのだと。

フェイト「うん。私は……アリシアの妹だよ」

アリシア「……そうなんだ」

そう言っアアリシアは静かにフェイトを抱き寄せた。

フェイト「!?!」

突然の事にフェイトは戸惑っている様子だった。

だがその戸惑いも、直ぐになくなった。

アリシア「良かったあ……なんか分からないけど……良かったよ……」

涙を流しながら、アリシアはそう言った。

アリシア「元気で……生きててくれて……良かったよ……」

フェイト「うん……うん!!」

そう言っフェイトもアリシアを抱きしめた。

そして二人は泣いた。

真道「ふう……良かったな。アリシア」

蒼騎「何だかんだで、記憶のどこかには……大切な人の記憶っ

のはあるんだよな」

涙を流して、再会を喜んでいる二人を、みんなは優しい笑顔で眺めていた。

キャラ設定

蒼騎 零二（あおき れいじ） 年齢18歳 身長175cm

別名『ロキ』

魔力ランクEX（測定不能）

魔力色『蒼・銀』

武器^{デバイス}『フェンリル』CV 浪川大輔

武器性能 モードを変える事が可能

拳 藍色の魔力光が全身を纏う。

剣 藍色の剣。スラっとしたエストック型。

魔術形式 神話式

希少能力

・『^{ウルザフロン}対人戦略予知視』簡単に言えば相手の行動を予測するというもの。予測なので自身がよく知った相手で行動が読みやすい相手にこそ効果を発揮し、その場合は数秒先の未来まで視ることが出来る。逆に見知らぬ相手で、思考をするタイプの相手にはあまり効果を発

揮できない。たとえ未来を呼んだとしても、体がついていかない攻撃には対応できない。そして使用するには肉体にも負担がかかってしまうため、多用は出来ない。

・『ダ・カーボ 復元する世界』対象を24時間以内の状態に戻すことが出来る能力。また24時間以内に会った人物なら手元に呼び戻すことも可能。更に発動相手を強制転移させることも可能。ただし魔力で発動するため、魔力を回復させることはできない。

技

・『フェンリスヴォルフ 神討つ拳狼の蒼槍』拳で放つ技であり、無意識に自身の膨大な魔力を拳に集中させて繰り出す拳撃。その威力は単純ながら強力。威力は拳に集中させる魔力の量によって変化する。更に簡単に言えばフルスロット魔力パンチ。

・『ダインスレイヴ 血を求める剣』剣で放つ技であり、この技を発動時に剣を鞘から出している場合、相手の魔力・血のどちらかを吸い尽くすまで発動は解除されない。すい尽くした魔力は剣の耐久度上昇や魔力量上昇に回される。

・『フロッティ 突き刺す正義の剣』剣で放つ技であり、相手の必ず貫く事ができる。ただし突き刺すと言う結果に大量の魔力を使用するため、威力が蒼騎の技の中で一番弱い。その為耐えることも可能。

・『フラガラツハ 報復者が放つ剣』剣で放つ技であり、その一撃は鎧や盾で止める・防ぐことは不可能である。更にどんな鎖をも切り裂く為、バンドをも容易く切り裂く。鞘から抜こうと思うだけでひとりで鞘から抜け、蒼騎の手におさまる。また、敵に向かって投げれば、剣

自らが敵を倒し、蒼騎の手元に戻ってくる。さらにフラガラツ八によつてつけられた傷は自然治癒では治らない為、治癒魔法を使わない限り、傷は塞がらない。ただし使用するには相手から攻撃を受けてからではなければ発動できないうえに受けるダメージ量も決まっているため、その量に達しない限り、切り裂く事はできるが自然治癒で治るうえに投げても剣自ら動くことはない。

・ 『ダ・カーポ復元する世界 蘇カーテシコールりし記憶 』魔力を魔術に変化させ、自身の記憶にある過去の魔法を一時的に再現することが出来る能力。実際に自身が出会ってない者の魔法も使う魔法の使用者の記憶を探ることとで再現が可能。ただし発動条件が難しい為、使うことがほとんどない。

・ 『ダ・カーポ復元する原初ゼロの世界 』魔法に秘められた能力（例えば魔力変換資質や希少能力または発動させる魔法）を虚無へと戻す能力。概念、時間、空間、世界のあらゆる能力を無効化してただの人間にしてしまう。この発動により、デバイスは機能停止になるため、BJなども解除される。ただし発現条件が難しい為、使うことはほとんどできない。

性格

- ・ 大雑把。
- ・ 不器用だが、しっかり者。
- ・ ちょっかいを出すのが好き。

- ・親友や仲間の危機には本質を発揮する。
- ・よく真道と喧嘩をするが、結局のところ仲良しである。
- ・戦いの時は冷静な判断をする。
- ・以外にフェミニスト
- ・女に弱い。
- ・アリシアの事は妹の様に慕っている。
- ・アリシアの事は好きだが自覚は無い。

アリシア 年齢18歳 身長160cm

別名『トール』

魔力ランクEX（測定不能）

魔力色『黄色・白・黒』

デバイス
武器『ミヨルニル』CV 平野綾

武器性能 モードを変えることが可能

槌 柄の短い黄色のハンマー。

二挺拳銃 白い銃と黒い銃。両方ともリボルバー。

魔術形式 神話式

希少能力

・『ノットウング九つの世界』九つの並行世界から任意に結末だけを手繰り寄せることが出来る能力。相手が防御すれば「防御に失敗した未来」を引き寄せるため、一度当たれば必殺となる。更には相手が攻撃すれば「攻撃に失敗した未来」を引き寄せることも可能。ただし、「相手の生死」に関しては干渉することができない。そしてこの能力は九つの中から一つだけを掴む為、一つを選べばほかは選べない。

・『ヴァイス・シユヴァルツ福音の魔弾』対象物の「音」を感知して無限に追撃する。生きてさえいれば必ず発する音を追うため、回避はまず不可能。更に音を感知して、どんな距離でもどんな音も聴き逃さない。ただし能力の使用には魔力を消費するため、永遠に使用することはできない。

・『アインハルト術式固定』二挺拳銃から放たれる魔力の弾丸を自在に固定することができる能力。一度に大量に固定したままにすることも可能。

・『ラーゼン術式固定解除』アインハルト「術式固定」によって固定した二挺拳銃から放たれた魔力の弾丸を発射させる能力。

・ 『タイビュランス疾風迅雷』 展開させた魔力で発生させた雷を自身に取り込むこと
によって、自身が雷となって移動することが出来る能力。

技

・ 『ブリューゲル・ブリッツ瞬間魔力換装』 一瞬だけ自らの魔力を爆発的に高め、自らに取り込み固定することによって自身が弾丸のように移動することが出来る身体能力の強化。時空間すらも歪めるほどの魔力爆発が発生するほどで、そのスピードは光速をも凌駕する。魔力消耗が激しいので長時間の使用には向かない。

・ 『ヴァイス・シユヴァルト福音の魔弾』 ブリューゲル・ブリッツ「瞬間魔力換装」の応用で、二挺拳銃に弾丸に魔力を含めて、光速を超えた射撃をおこなう。発射された2発の弾丸は十字架のように交差して対象に命中する。任意の対象の音を察知して無限に追跡するという性能がある。ただし魔力装填に時間がかかる。

・ 『シュトゥルム・クロイツ破邪必滅の流星群』 二挺拳銃の魔力弾丸を空中に大量に展開。そして固定して、それら全てに魔力を含めた状態で、ラーゼン術式固定解除を行い「ヴァイス・シユヴァルト福音の魔弾」として弾丸の雨として降らせて攻撃をする必殺技。ただし、配置に時間がかかる。

・ 『トルハンマー総てを射抜く雷光』 「タイビュランス疾風迅雷」の状態で槌による攻撃。直撃した瞬間に強力な雷のエネルギーが打ち出され敵を粉碎する。ただしこの技は槌が当たるもののみしか粉碎できない。

・ 『トルハンマー総てを超越せし九つの雷光』 フルアクセス「九つの世界」を駆使した状態で、同時に9つの「トルハンマー総てを射抜く雷光」を放つ必殺技。仮にこの攻撃を

何らかの形で防御したとしても、「九つの世界」ノートウングによって並行世界からこの技を回避してない世界とリンクして手繰り寄せることが出来、命中させることが出来る。唯一の弱点は槌の一撃を零距离で当てないと技自体が発動しないこと。技自体に耐える強度があった場合も、耐えることは可能。ただし使用するには大量の魔力が必要なため、最終攻撃として扱う。

・『フリズスキャルウ四次元視』瞳に魔力を集中させることによって、元々良かった異常なまでの視力を更に強化させることができる。これによって数秒先の未来まで見ることが可能になる。ただし目で見えないものや、自身の脳の処理が追いつかない速度に対しては効果を発揮しない。さらにこの能力で視た未来を変える事はできない。何故なら一度視た未来は過去になるため。その為あまりこの能力は使わない。

・「ラゲナロク神々の運命」最終魔法と呼ぶに相応しい程の魔法。この魔法の使用条件は『自らの全ての魔力を使う』発動すれば狙う相手を必ず破壊する。ただし使用者は発動後、魔力を完全に回復するまでほとんど動けなくなる。

性格

・生命に対して真剣に考える。

・優しい。

・ドジっ娘。

- ・よく失敗するがめげずに頑張る。
- ・怒った時はなのと同じくらい怖い（母親プレシァ譲り）。
- ・何でも挑戦しようとする。でも失敗する。
- ・どんな状況でも基本的には笑顔。
- ・我尽。
- ・全体的に子供。

バカと剣士とバトルマニア（前書き）

運命の再会をしたフェイトとアリシア。

二人の再会は、物語の始まりを告げるものとなる。

そして今回はあの人があの人と戦う。

その結果と彼の實力とは・・・

バカと剣士とバトルマニア

ある日、蒼騎零二はシグナムに対決を挑まれた。

本人は物凄くかつたるそうだったのだが・・・

真道「頑張れ零二！」

アリシア「零ちゃん！がんばろー！」

うーん・・・^{バトル}アリシアの応援が恐ろしく嬉しいから・・・

蒼騎「分かった。受けてたとう」

真道「(うわ・・・単純・・・)」

俺は右ポケットにしまっただけあるデバイスを取り出して前に拳を放つようにして構えた。

蒼騎「フェンリル。セット・アップ！」

シグナム「レヴァンティン。セット・アップ！」

さて・・・レーヴァテインの名を持つ武器を使いし騎士の實力・・・
見せてもらおうぜ！

真道 S i d e

真道「始まるか・・・」

私はアリシアとなのは達とスバル達と共に離れた位置でモニターで二人の戦いの様子を確認している。

私の右隣にはスバル。左隣にはアリシア。

何か・・・妙に落ち着かないな・・・

まあいいや。

アリシア「零ちゃん・・・本気だせるかな？」

真道「・・・無理・・・だろうな」

スバル「へ・・・どういことですか？」

隣にいるスバルが私とアリシアの話しを聞いて不思議そうに聞いてきた。

スバルだけじゃない。周りの皆が、疑問に思っていた。

それを代表してフェイトが聞く。

フェイト「シグナムは私よりも強いよ？それに・・・『烈火の将』って名も持つてる」

へえ・・・あの程度でか・・・

私は一度シグナムと刃を交えたからこそ、この言葉を言う。

真道「シグナムは私達の敵じゃない。あの程度の刀で・・・レーヴアティンを使うなんて・・・宝の持ち腐れとは言ったものだ」

全員「!?!」

ヴィータ「んだと・・・てめえ!!!!!!!!!!」

ヴィータは私に向かってハンマーの形状をしたデバイスを振り下げた。

真道「・・・」

私はそれを追いついて右手で掴んだ。

ヴィータ「ぐっ!?!」

ぴくりとも動かない槌。

真道「こういうことだ。分かったな？」

そう言っつて私は手を離す。

そしてヴィータは少し落ち着いたのかデバイスをしまった。

ヴィータ「・・・化けもn『黙れ!!!!!!!!!!』!？」

ヴィータが言い切る前にアリシアが右手に白いリボルバーの銃を出してヴィータに向けて放とうとした。

真道「アリシア・・・止める」

そう言っつて私は銃口を右手で塞いだ。

アリシア「でも・・・この人、創ちゃんを愚弄した!だから・・・」

真道「だからいいって。私は化け物に変わりはない。皆と違って俺は・・・規格外過ぎる」

笑顔でそう言っつた。

するとアリシアは下唇を噛み締めながら銃をしまった。

真道「ありがとう。アリシア」

私はアリシアの頭を撫でて褒めた。

アリシア「・・・うん」

アリシアはそのままモニターに目を向けた。

私たちも、モニターに目をやった。

俺は両手に蒼い魔力を纏った。

シグナム「それがお前のデバイスか・・・見たことがない形状だな。まさか魔力そのものが拳に纏い戦うとは・・・」

蒼騎「俺達は皆とは違うんだよ。さて・・・始めるぜ！」

シグナム「いざっ！！！」

そして俺とシグナムはぶつかり合った。

蒼騎「行くぜ・・・フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍！！」

シグナム「紫電一閃！！」

俺の魔力を纏った右手とシグナムの刃がぶつかり合う。

蒼騎「はああああ！！！」

シグナム「くっ！？」

俺はそのまま拳で押した・・・！

シグナムは危機を感じたのか素早く後ろに下がった。

シグナム「・・・中々やるな・・・」

蒼騎「お前は・・・あまり強くないな」

シグナム「何!？」

シグナムは俺の発言に怒りを見せた。

それはもちろん剣士の誇りが許さないのだろう。

シグナム「いいだろう・・・私の本気を見せてやろう・・・」

そう言うと刀だったレヴァンティンは姿を変え、弓へと姿を変えた。

蒼騎「それがお前の本気が・・・良いだろう。ならば俺も少々本気をだそう・・・フェンリル!!」

フェンリル「了解ですよ」

そう言うとフェンリルの姿は変化して、刀へと姿を変えた。

シグナム「翔けよ・・・隼!!!!!」

シグナムは矢を俺に向けて放った。

シグナム「シュツルムファルケン！！！！！！」

放たれた矢は少しずつ俺に接近してきた。

蒼騎「

ダ・カーボ
復元する世界

」

俺は両手を前にだすと蒼い魔方陣が現れ、盾の様になった。

シグナム「私の本気を、受け止める気か!？」

蒼騎「ああそうだ！俺のすることたあそんなことしかできねえからな
！……」

そう 俺にできること。それは

そして強力な矢が爆発する。

そして煙の中からは、無傷の俺が出てきた。

シグナム「何!?!」

蒼騎「相手の能力もろくに分析しねえで俺に勝とうなんて余裕、お前にあるとでも思ってたのか?」

シグナム「くっ!?!?!」

俺の言った事実には悔しそうに下唇を噛むシグナム。

蒼騎「あと、俺と“長期戦”は止めたほうがいい。更にお前が“弱く感じる”からな」

シグナム「何だと・・・貴様!?!」

俺はシグナムと言う一人の騎士のプライドをズタズタにしてやる。

自覚はある。

だが、俺達は理解して欲しい。

神話級の名を持つ武器を使う責任を。

蒼騎「お前の限界がその程度なら、俺の勝ちだ」

シグナム「ふざけるな。私がこれで終わるわけがなかるう・・・行くぞー！レヴァンティーンー！！」

そう言うとカートリッジを5発放ち、刀身に魔力を込める。

蒼騎「だったら、少しだけ見せてやるよ。俺の力を」

そう言うと俺の全身から蒼い魔力光が溢れて右手に弓がもたれていった。

シグナム「な・・・レヴァンティン・・・だと・・・」

そう。俺の手にもたれているのはシグナムが持っているレヴァンティンそのものだった。

蒼騎「俺の能力は、ここからだ！！！！」

た。そうやって左手に矢を持ち、矢に蒼い魔力を纏わせながら弓を引い

シグナムも俺と同じ事をする。

蒼騎・シグナム「駆けよ……隼!!!!!!」

蒼騎「

オバーロード・
未だ果てぬ烈火の貫く矢

」

シグナム「シュツルムファルケン!!!」

二つの矢は互いにぶつかり合い、貫いたのは俺の矢だった。

シグナム「な……私の矢が……負け……て」

そしてシグナムは矢を喰らい、爆発した。

能力と化け物と・・・（前書き）

シグナムが完全敗北をした。

その結果は誰も予想だにできなかったこと。

ただその結果を分かっていたのは、真道とアリシアの二人。

そして少し明かされる、蒼騎の使った技の正体

Rewrite「今回はfortissimoを知らない人の為に作った内容となっています。それでもよく分からない場合はキャラ設定に変更を加えてそこで説明します」

能力と化け物と・・・

真道 Side

ここは機動六課の中にある病室。

ベットに寝ているのは烈火の将と言われたシグナム。

皆はシグナムを囲むように立っていた。

だがここにアリス^{トル}と蒼騎^{ロキ}はいない。

最初はアリスアがいたのだが、蒼騎がいなくなったため、探しに行つてくれている。

ま、アリスアに任せれば大丈夫だろう。

そして皆は私を見てくる。

真道「聞きたいことは分かってる。蒼騎^{ロキ}の能力についてだな」

なのは「うん。シグナムさんを倒した技が、まさかシグナムさんの技なんて・・・」

真道「それは少し違う。確かに蒼騎^{ロキ}が使ったのはレヴァンティンの技だ。だが、少し違う」

スバル「何が違うんですか？」

真道「そもそも蒼騎が使った能力。それから説明しよっか」

そう言っつて私は皆にわかるように説明をした。

真道「蒼騎の使った能力・・・『ダ・カーボ復元する世界 カーテンコール蘇りし記憶』は一度視たことがある技や、その使った技の使用者の記憶の中に存在する技を使用することができる能力だ。発動条件は『相手の技を視る。覚える・思い出す』だ。そして発動するときにも条件がある。それは『発動する場合、一度その技をオーバーロードさせる』ことだ」

フェイト「オーバーロード？」

真道「ああ。オーバーロードってのその技の元々存在するプログラム構成に干渉してその能力を変化させることを言う。蒼騎はそれを使うことで、独自のシユツルムファルケンを完成させたんだ」

はやて「独自の・・・まるで闇の書みたいやな・・・」

そう。闇の書・・・現在の夜天の書には今まで集めてきた魔導士のリ
ンカーコアに記憶されている技が記憶されている。

その技を過去に初代リインフォースは使った。

もちろんはやても使うことができる。

ただ、それは蒐集した時の威力と変わらないので成長がない。

だが蒼騎の能力はそれを更に強化して放てる。

真道「まあ簡単に言えば相手の技を自分なりに強化して使うことができる
ってだけの単純な能力なんだけどな。でも、私の苦手な能力
でもある」

そう。技や能力をコピー強化されて放たれると言うことは、奥の手
を簡単には出すことができない。

無闇に使えば返り討ちに合うからな。

だからそれを攻略する方法を私は考えてある。

真道「シグナムの敗因は、蒼騎の挑発に乗って奥の手を使ってしま
ったこと。騎士として、恥じるべきことだ」

そう言うと皆は何も言い返さずに悔しそうな表情をするだけだった。

真道「ヴィータ……だったな。私達は確かに、化け物だ。それは否定しないし認める。だから私達を嫌うなら嫌って貰って構わない」

ヴィータ「！」

ヴィータは後悔の表情をしていた。

真道「ただ……アリシアだけは……あいつだけは、私達と違う普通の女の子として見て欲しい」

全員「！？？」

その発言にみんなは驚いていた。

真道「あいつは、化け物の傍おれたちに居るべきじゃないんだ。あいつはあいつの道を進むべきだって・・・そう思うから・・・だから、アリアの事・・・お願いできるか？」

全員「・・・」

その言葉に皆はやはり答えに困っていた。

だが・・・やはり彼女はすぐに答えた。

フェイト「もちろん。私の・・・大切な姉だから」

なのは「うん。フェイトちゃんの家族を否定はしないよ」

真道「・・・ありがとう」

はやて「それに、別に真道君達を否定したりもせえへんよ」

真道「え・・・」

その答えに、私は驚きを隠せずにいた。

はやて「確かに蒼騎君の能力も凄かったよ。そやけどそんなの関係

あらへん。私達は別に嫌ったりも否定したりもせえへんよ」

真道「……」

なんだろう……ここは、どうしてこんなに暖かいんだろう。

今まで私達の力は化け物として扱われたきた。

だが、ここにいる人は皆優しくて……温かくて……

皆が皆、アリシアの様に優しい人たちだ……

ヴィータ「さ、さっきは悪かった。化け物なんて言っ……本当
にごめん」

そう言っってヴィータは頭を下げた。

真道「あはは……それだけしっかり謝られちゃ怒れないよ」

そう言っって頭を撫でた。

ヴィータ「あ／＼／＼」

真道「……あ、悪い。つい癖でやっちゃまった」

そう言っって即座にその手を離した。

ヴィータ「あ、いや、別に／＼／＼」

何故かヴィータの顔が紅い・・・どうかしたのか？

まあいいや。

真道「取り合えず、皆には本当に感謝してる。これからよろしく頼む」

蒼騎 Side

蒼騎「・・・」

シグナムとの一騎打ちが終わり、俺が向かったのは機動六課の屋上だった。

そこに着くと俺は屋上から外の世界を見渡した。

一息つくためでもある。

蒼騎「すう・・・はあ・・・」

ここは何故か空気が綺麗だ。

そして遠くを見ればそびえ立つビルやマンションの数々に少し圧巻していた。

蒼騎「ここは、結構いい場所だな」

素直な感想だ。

俺と創世は二人でアリシアを守りながら俺達を狙う謎の勢力と戦ってきた。

それはまさに戦場。

そんな平和とは程遠い世界で生きてきた俺と創世にとってここはあまりに平和過ぎて・・・羨ましい。

????? 「やっぱり、ここにいた」

蒼騎「え……」

ドクンツと心臓が大きく揺れた感覚があった。

振り返るとそこにはアリシアがいた。

蒼騎「アリシア……どうしてここに？」

アリシア「何年零ちゃんと一緒にいると思ってるの？そのくわいいる場所分かるよ」

そう。アリシアなら、俺のいる場所にくることくらい分かっていた。にも拘らず俺はそれが現実になってしまったことに動揺してしまっ

た。そんな動揺がバレないように平然を装いながら話を進めた。

蒼騎「シグナムの様態は？」

アリシア「それ、零ちゃんが誰よりも分かっているんじゃないの？」
仰る通り。

殺さない様に威力は調整した。

アリシア「かつこよかったよ。戦ってた時の零ちゃん」

蒼騎「っ！」

再び心臓がドクンツと揺れた。

こいつが素で言っているのはわかるんだが・・・やはりドキッとして
しまっわけ・・・

それでも俺は何とか平然を装って話した。

蒼騎「ありがとな。ま、簡単には負けないさ。俺達はな」

アリシア「うん」

そう言ってアリシアは俺の隣に立って俺と同じように外の世界を見
渡した。

アリシア「綺麗だねえ〜！」

気持ちよさそうな声でそう言った。

蒼騎「そうだな。ここなら、俺達は平和に暮らせるかもしれないねえ」

アリシア「うん・・・」

それから少し、屋上に吹く風に髪を靡かせているアリシアを見つめていた。

アリシア「？どうしたの？」

蒼騎「あ、いや・・・なんでもねえ」

つい見とれていた。

恥ずかしいと感じて俺は目を逸らした。

蒼騎「そ、そろそろ戻ろうぜ。少し寒くなってきたしな」

そう。何だかんだで季節は冬になっている。

屋上に何分もいれば凍えちまう。

アリシア「うん！」

そう言って俺とアリシアは機動六課の中に戻った。

アリシア「零ちゃん・・・ありがとうね」

この言葉を、俺は聞くことができなかった。

そして俺達はこれから、新たな戦いに身を捧げることになる。

シグナムのシュトルムファルケンを使うことができたのも、この能力で一度みたシュトルムファルケンを自ら独自に変えて使用した。ただし発動するのは簡単ではないため、戦いの後半にしか使用できない。

フラグが勝手に建っていく(前書き)

機動六課に受け入れられた真道達。

そして始まる新たな日常。

3人の登場が、機動六課で様々な事を起こす。

フラグが勝手に建っていく

真道 Side

真道「なるほどなるほど・・・」

スバル「それとですね!!」

翌日、私は機動六課の中をスバルとティアナの二人に教えてもらっている。

お昼になった今は食堂にいる。

スバル「いつたきます!!!」

真道「お・・・おお・・・」

もはや啞然するしかないな・・・

テーブルに置かれる10人前はくだらないミートスパゲティの量。

それを一人で幸せそうに食べるスバル。

ティアナ「初めて見る人は皆同じリアクションをとるんですね・・・

」

そう言いながらティアナは小皿に盛られたスパゲティを食べていた。

真道「食費がかかりそうな女の子だな」

ティアナ「そうですね・・・」

真道「というか、スバルって確か姉がいるんだっただよな？その人って・・・まさか・・・」

ティアナ「はい・・・これと同じです」

・・・なんじゃそりゃ・・・

世界には偶に『異常』な存在が現れる。

それを天才と言ったりするが・・・この子の一家はもしかして、大食いのセンスがあるのか!?

ティアナ「これだけ食べてこの体型なのは・・・少し羨ましいですけど」

真道「あはは・・・大変なんだな」

スバル「んっ　おいしいっ」

幸せそうだな・・・

良かった。幸せそうな人生を送れてて。

スバル「?どうかしたんですか?」

真道「え?あ・・・いや、可愛くなって思ってな」

スバル「ぶふっ!?!」

スバルは喉にパスタを詰まらせた。

真道「だ、大丈夫か!?!」

私は背中を摩ってあげる。

ティアナ「ほらスバル。水」

そう言つてティアナは水を渡すというある意味コンビネーション。

スバルは水を飲むと、頬を赤くして落ち着く。

スバル「ご、ごめんなさいノノノノ」

真道「勢い良く食べるからだ。ほら、唇にケチャップついてるぞ」

そう言つてスバルの唇についているケチャップを人差し指で拭き取つて私はそれを口に含んだ。

スバル「~~~~~っ／／／／／／／／／／／／」

真道「す、スバル!? どうした!?」

急にスバルの顔が真っ赤になってポフツと爆発した。

ティアナ「い、今のは真道さんが悪かったと思います」

真道「わ、私がか?」

何故だ?何かしたか?

スバル「(し／／／／／／／真道さんと／／／／／／／か／／／／／／／
関節キス!?)」

真道「誰か冷水持ってこい!!!大量に!!!!!!」

ティアナ「何か……また大変になりそうな気が……」

それからスバルが再起動したのはそれから1時間程のこととなる……

スバル「す、すみません／＼／＼」

恥ずかしかつたのか頬を紅くしながら謝った。

真道「気にすんな。謝ることじゃないさ」

スバル「はい・・・ほんとにすみませんでした・・・」

ティアナ「さて、私達は訓練に行きましょう」

スバル「うん！」

真道「え・・・午後も訓練なのか？」

「16歳にそこまでやらせないといけないのか・・・大変だなあ・・・」

ティアナ「あ、真道さんもあれだったら来てみますか？」

真道「良いのか？」

ティアナ「多分大丈夫だと思いますよ？」

スバルとティアナ達の訓練姿か・・・どんな動きをするか興味があるなあ・・・

真道「よし。行くか」

真道「と言っわけで、見学させて貰っよ」

なのは「うん。別に私は問題ないよ。できれば真道君目線の意見も貰いたいし」

なるほど。お互いに得があるわけか・・・この人19歳のくせして恐ろしい頭のキレだな・・・

なのは「ヴィータちゃんも良いよね・・・って、ヴィータちゃん？」

ヴィータ「・・・え？あ、ああ・・・」

なのは「？どうかしたの？」

真道「体調でも悪いのか？」

ヴィータ「だ、大丈夫だ！！問題ねえ！！」

そう言っってヴィータはずかずかへ行っってしまった。

真道「どうかしたのか？喧嘩でもしたか？」

なのは「ううん。何か真道君達の話しをしたりするといつもあんな感じなの」

私達？

・・・ああ、私達の事・・・まだ引きずってんのか。

真道「ま、自分なりに反省してるのかもな。あの時の事」

なのは「ううん・・・問題はそれだけじゃないと思うんだけどねえ」

真道「？他にもあるのか？」

なのは「男の子には分からない問題だよ」

そうやってなのはは空を飛んで皆のもとに行った。

真道「あ、パンツ見えてんぞー！」

なのは「え、エッチ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そうやって私がピンク色の閃光によって吹き飛ばされたのは余談である。

スバル Side

なのは「それじゃ午後の訓練を始めるよ／＼／＼／」

全員「はい！」

あれ？なのはさんの顔が少し紅いような・・・

さつき真道さんと話しをしてみたいけど・・・

あれ・・・なんでだろ・・・何でこんなに気になるんだろう・・・

ティアナ「・・・ばる！スバル！！！」

スバル「え？」

ポーツとしてるとティアが怒鳴りながら私を呼んだ。

ティアナ「ほらぼさつとしてないで訓練始めるわよ！！！」

スバル「う、うん！！！」

取り合えず、真道さんに褒められるように頑張らないと！！！！

・・・あれ？どうして真道さんに褒められたいんだろ？

真道 Side

真道「い……つつつ……」

先ほどののはから砲撃を受けた私は取り合えず目を覚まし、モニターから皆の訓練の様子を見ていた。

スバルが魔力で作ったレールをローラーで走ってる……あれと拳に付けてるナツクルがスバルのデバイスか……重そうだな……でも、あの動きの良さ……16歳であんな重そうなのをつけてあの動きとは恐れ入るな。

いや、何よりも凄いのはあの体力と持久力だ。

体力⇨持久力。持久力⇨体力とも言えるほど二つは密接な関係と言うのが私の持論なのだが、スバルはまさにその言葉を証明するかの

ような動きを見せる。

あんな細い腕に太ももをしてあの動き・・・そして迫る砲撃や弾幕を恐れないその真つ直ぐな度胸。

そしてあの破壊力と突破力。

持久力＋突破力＋度胸が合う将来と言えば・・・

スバルはもしかしたら救助隊の素質があるのか？

ティアナはまた面白い戦闘をするな。

幻術に二挺拳銃、そしてその銃が刃にもなるのか・・・

そしてあの頭のキレ。

天才って偶にでるけど、あいつの様な努力して天才になる奴ってのは進化し続けると化けるからな。

あの思考ですぐに戦術をたてて皆のその能力をしつかりと引き出させてる。

・・・でも、あいつにはそれが似合わない気がする。

チームを確かに纏める能力はある。

だが、それを本人自身の素質は能力とは違う。

あいつは単独戦の経験を積み上げてあげるか・・・せめてフルバックに下がって皆の指示だけに集中させてあげたいな・・・

そもそも銃ってのは精密さが問われる。

精密さ⇨集中力。集中力⇨精密さに繋がる。

つまりそれは、シンプルな戦闘でも大量の情報を整理しないとけないということ。

銃の精密さが少し鈍るだけで味方を殺してしまう。

だからと言って銃だけに意識を集中させると浅はかな戦術になりかねない。

本当の理想系ってのは、銃は銃。司令塔は司令塔できっちり作ること。

それができないこのFWってチームの重要な人はきつと・・・あの

キャラotte子だな。

あんな幼いのに危険な世界に入ったその精神力と度胸。

更に重要なのは彼女は回避が凄く上手い。

きっと訓練を受けたんだろう。

ああ言うフルバックの補助系魔法を使う人に求められるのは、チームの中で一番生存率が高く、後ろにいて安心できる信頼感のある人だ。

キャラはまだ若いながらも、それがしっかりある。

しっかりと周囲を見渡し、自分の魔力量でできる最大限の補助をこなしている。

でもま、その分疲れるのが速い。

だからこそ、皆の実力が試されるし、ティアナの戦術が試されてしまふ。

止めとするならあのエリオだな。

前方だけの突進だけだったら間違いなくあの中で最強だ。

私の槍と一度戦ってみたいと思うが、まあそれはいいだろう。

あいつもキャロと同じ年のほうで、あの若さであの力・・・

いや、力と言っても、その力を出しているのはあの圧倒的な速度だ。

速度はそのまま力に変わる。

野球ボールやサッカーボールが遅い速度よりも速い速度の方が威力は高い。

つまりはそういう事。

そのエリオに求めるとしたら・・・やはりターンの速度とキレの良さが求められるな。

それが上手くなれば、あいつは高速の世界で戦える強い戦士になれる。

真道「ここは・・・良い素質を持った奴らばかりだな・・・」

?????「最初は、そんな感じじゃなかったんだけどね」

あれ・・・この声は・・・アリシアか？

真道「アリシア？」

そう言っつて右を向くと金髪の女性はいた。

だが生憎アリシアではなかった。

フェイト「ううん。フェイトだよ。やっぱり声が似てるとわからないか」

真道「あ、ごめん」

フェイト「ううん。良いの。元々はアリシアのコピーみたいなものだし・・・」

？どつ言っつ意味だ？

・・・ああ、作られたっつて言っつてたな・・・

真道「お前、馬鹿じゃねえの・・・か！」

そう言っつてフェイトの額にデコピンをしてやった。

フェイト「いたっ……うう……な、何するの？」

涙目になりながら額を両手で押さえて私にそう言ってきた。

真道「フェイトはフェイト。アリシアはアリシア。一緒にすんなバカ」

フェイト「ば、バカって失礼な!!!」

真道「いや馬鹿だ。自分が誰だか分かってないからな。お前はフェイトだ。私たちの大好きなアリシアとフェイトは違う。そんなこと人に言われたいのか？」

フェイト「べ、別にそんなわけじゃ……」

真道「最後まで言い切らないあたりは、自覚があるみたいだな」

フェイト「う……うん。ごめん」

あはは……謝り出したし……

真道「お前さ、寂しいなら……不安なら、誰かに相談しても良いじゃないか？」

フェイト「え……」

真道「お前、結構何でも一人で抱え込むって性格してるように見える。その結果、今みたいな自虐的な発言になってしまっ。だから……私でも良いし、なのは達でも良いから、相談しろよ」

そう言うとフェイトは少し不安そうな顔をしていった。

フェイト「でも……それじゃ皆に迷惑がかかっちゃうから……」

真道「……ほんとにお前、アリシアより馬鹿だな」

フェイト「!!!!!!」

おお……凄い反応……アリシアが少しかわいそうだ……

真道「お前さ、自分勝手な皆を作らないでくれるか？」

フェイト「自分勝手な皆……」

真道「皆は相談されないとフェイトを心配に思わないのか!? フェイトから行動しないと、誰も何もしてくれないのか!? 違うだろ? 皆、言っても言わなくてもフェイトの事が心配で心配でしょうがないんだよ。だって……フェイトはいつも相談しないから。それは、信頼されてないのと一緒だ」

フェイト「信頼……」

やっと分かってきたか……

真道「フェイト。お前、偶にさ『自分はもしかして皆に信頼されていないんじゃないか?』って考えるだろ?」

フェイト「!?!?」

わっかりやすいなフェイト・・・

真道「そうやって不安になる理由ってのはな、原因はお前自身にあるんだ。自分から何もしなかったらな、何も始まらない。踏み出す一歩は、いつだって自分自身の足で歩くんだ」

フェイト「!?!」

ふう・・・なんか喋り過ぎたな。

真道「ま、そこから先はお前自身で考えろ。諦めない奴の味方で、すぐに諦めるような臆病者の奴の敵だからな」

そうやって私はなのは達のもとに歩きだした。

フェイト「・・・ありがとう!私、歩いてみるから!・・・!頑張つて、進むから!・・・!」

真道「ふ・・・期待してるよ!!アマテラス美しき雷刃の女神よ」

フェイト「あ//////////ありがとう//////////」

そうやって私はなのはのもとに行った。

フェイト Side

フェイト「あ……アマテラスって確か……」

日本の女神の名前だったよね／／／／

わ、私ってそ／／／／そんなふうに見てもらえたんだ／／／／／
／／

フェイト「なんか……元気出てきたなあ……」

そうやって私は仕事に戻った。

フラグが勝手に建っていく(後書き)

フラグを建てて建てて建てて建てる彼の登場は、機動六課を大きく変化させることになる!?

Rewrite」つと云うか・・・建てすぎて困る・・・」

蒼騎「いざとなったら俺が止める」

アリシア「私も止めるよ!!」

蒼騎「いや・・・アリシアは役に立つか・・・なあ・・・」

アリシア「?」

ロキとトールの日常（前書き）

Rewrite「今回は蒼騎君とアリシアちゃんの物語！」

真道「しかも次回にはIKA先生とのコラボらしい！」

Rewrite「楽しみですね！」

ロキとトールの日常

蒼騎 Side

蒼騎「・・・んあ？」

朝になり、目を覚ました俺はいつも通り布団から起き上がるつもりだ。

ふによん

?????「やん・・・」

え?!何!?何なのこの女の声!?

そして謎の右手にある柔らかい何かが何か分からないが、意識が徐々に覚醒してきたので、毛布を一気にまくり上げてその正体を確認した。

アリシア「むにゃ・・・」

蒼騎「な・・・なん、だと・・・」

蒼騎「うるさいな一々。だったら働け」

アリシア「うう・・・そ、それはまたいつか・・・」

蒼騎「“いつか”って言い出してもう何年経つことやらっ」

ジト目でそう言った。

アリシア「う・・・ね、零ちゃんのいけずう!!」

蒼騎「誰がいけずなんだよ。お前に言われるこっちの身にもなれ」

アリシア「うう・・・むううう!!!!」

そして朝っぱらからアリシアと睨み合う俺。

・・・っ!?

つか・・・アリシアの姿が・・・

蒼騎「そ、それよりもアリシア・・・なんだその服装は・・・」

上に白い長袖の服を着て、下はピンク色のパンツだけ。

しかも上はボタンがいくつか空いて胸元が見えている・・・

アリシア「見ての通りだけど?」

そう言って全身を一回転させて服装を見せた。

すると引きずられるように胸が揺れた。

蒼騎「っ……い、いいからさっさと服着ろ！俺はシャワー先に浴びるから」

アリシア「うん。分かった」

そう言って俺は走りながらシャワールームへ移動した。

蒼騎「はぁ……朝っぱらからこんなに疲れるなんて……」

お湯に浸かりながら俺はそんなことをぼやいていた。

シャワーを浴びずとも、あんな姿を見てしまっただけで意識なんて一瞬で覚醒してしまうものだ。

つかアリシア・・・また胸が大きくなったような・・・

蒼騎「いやいや！！！！何考えてんだ俺は！！！！」

そう言ってお湯を両手で持って顔面にバシヤンと勢い良くかけた。

そして顔を振って水を飛ばす。

蒼騎「落ち着け俺・・・寝てる間に変なこととはしてない筈だしな！？」

何よりも問題はそこである！！！！！！！！！！

俺とアリシアはロキとツール。戦友同士であるわけであって決してあっちの関係ではない！！！！

そつだ俺！！信じるんだ自分を！！

ビリーブ！！ビリーブだ俺！！！！！！！！

アリシア「零ちゃん！入るよ！！！！」

蒼騎「おう！……え？」

素で返事をしてしまった……いやいや！！！！待て待て！！！！

アリシア「お邪魔します」

蒼騎「わああああ！?!?!」

いきなり風呂にアリシアも入ってきた。

白いタオルを巻いているため、見てはいけないものは見えない。

俺は両手で下半身のあれを隠す。

蒼騎「お、おま……何で入ってくるんだよ！！」

アリシア「え〜だって零ちゃん中々上がってこないから待ちきれなくて！」

そう言って舌をぺろっとさせた。

こいつ……

蒼騎「いいから待ってる。すぐ上がるから」

アリシア「いいから、たまには一緒に入る！」

たまつて……

蒼騎「もうお前は“自分で出来る”だろ？」

俺とアリシアが初めて出会ってアリシアが目を覚ました時、アリシアは何も出来なかった。

まるで赤ん坊のように・・・

だから俺と真道は一緒に頑張ってアリシアに色んな事をした。

それから一年半くらいでようやく人並みになってくれた。

もちろんその間、風呂にすら入れないため、俺と真道でかなり頑張って風呂にいれた。

頭洗ったり体を洗ったり・・・あれがもしかしたら一番地獄だったかもしれないねえ・・・

いや、トイレも中々地獄だったな・・・うん。

蒼騎「お前、いつまで俺達に甘えるなよ。もうガキじゃねえんだか

らよ
「よ」

アリシア「・・・零ちゃん・・・お願い」

うつ・・・上目遣いに涙目だと・・・しかもほぼ裸・・・

蒼騎「・・・す、好きにしろ」

アリシア「やた!!」

負けた・・・はあ・・・

アリシア「それじゃ背中洗って!!」

蒼騎「調子に乗んな!!」

それからしばらくし、俺とアリシアは食堂に向かった。

蒼騎「さて、アリシアにはピーマンサラダとナスの煮物つと」

アリシア「零ちゃん!!!私を殺すつもり!?!」

アリシアはピーマンとナスが嫌いだ。

更に辛い物も嫌いときた・・

・・・子供だな。

蒼騎「むしろピーマンとナスは体にいいから食べた方がいいぞ?」

アリシア「嫌だ!嫌だ!!!食べたくないんだ!!!!!」

蒼騎「江戸時代のガキがお前・・・」

こいつ・・・ほんとに面倒い・・・

アリシア「とにかく私は食べない!」

蒼騎「食べなさい」

アリシア「嫌だ！」

蒼騎「嫌じゃない」

アリシア「どうして!?!」

蒼騎「どうしても」

アリシアの放つ球を俺は冷静に返す。

アリシア「ううゝ零ちゃんはいけずうゝ!?!」

またそれが!?!?

アリシア「くうう!?!!だ、だったら零ちゃんもピーマンとナス食べてー!」

蒼騎「別に良いぜ。ピーマンとナス好きだし」

アリシア「くうううううううううう!?!?!?!?!」

なんて悔しそうな光景なんだ・・・

それからアリシアは泣きながら食事をしました。

アリシア「うう……今日の零ちゃんは酷い」

外に出てアリシアはさっきからずっとそんな感じだ。

蒼騎「お前が我侭過ぎるんだよ」

アリシア「うう・・・創ちゃんはもつと優しいのに・・・」

蒼騎「あんな女ったらしと俺と一緒にすんな。あんな野郎と一緒にされるなんて傷つくぜ」

あいつ、きつと今もフラグを建てているはずだからな。

アリシア「そんなに言ったら創ちゃんもショックだよ」

呆れながらそう言うが、実際あいつと一緒ににはされたくねえ。

学校に行ってた時も、あいつと俺はモテたがあいつの方がどちらかというとモテていた。

ま、喧嘩なら負けねえがな。

蒼騎「それよりアリシア、お前フェイトと話ししねえのか？」

アリシア「うん。昨日、色んな事をいっぱい話したから」

蒼騎「そっか・・・」

不思議だな。

運命によって二人は奇跡的に再会できた。

それはとても良いことで、幸せなことだと思う。

俺や真道と違って、アリシアは家族と再会できたんだ。

それを大切にして欲しいと願うのはきつと、俺たちが失っているからだ。

蒼騎「大切にしろよ。妹の事をな・・・“お姉さん”」

アリシア「うん！任せなさい〜！」

蒼騎「ま、未だにガキだからそれも無理か」

アリシア「ひ、酷~~~~い!~!~!」

そう言って俺とアリシアは真道と会い、スバル達と色々な話をした。

そして夜。

アリシア「何でまた押入れなの!？」

蒼騎「何度も同じ事を言わすな！」

また布団で寝るか寝ないか話すのであった。

ロキとトールの日常（後書き）

少し不器用な彼女にとって彼女の存在はとても大きな存在だろう。

何故なら、あんなにも仲が良いから・・・

そして3人は物語を作っていく。

Rewrite「今回はIKA先生との番外編です！」

初コラボ 番外編 星屑の騎士との出会い（前書き）

Rewrite「今回は前回の予告通り、IKA先生とのコラボです！」

真道「初コラボか・・・何か嬉しいな」

初コラボ 番外編 星屑の騎士との出会い

No Side

真道「おおおおおおお！！！！」

蒼騎「おらあああああ！！！！」

アリシア「（、（ハア…）」

本日の3神は外で喧嘩をしていました。

オーデインとロキの喧嘩をツールが呆れてみる始末。

そんなこんなでよくある喧嘩を行なっている。

クラナガンのとある公園でのんびりしていた。

だがいつも通り二人は喧嘩を始める。

理由なんてどうでもいい。

だが二人は全力で喧嘩をする。

ほんと、喧嘩するほど仲が良いとは言ったものだが、二人はほんとはよく喧嘩をする。

だが、こんな喧嘩も彼女に任せれば大丈夫！

アリシア「二人とも……これ以上喧嘩すると……分かってるよね？」

真道・蒼騎「!？」

アリシアの全身から魔王化した高町なのはよりも恐ろしいオーラが流れ出ていた。

それは喋り方を聴いてもわかるほどである。

アリシア「二人とも……少し、頭……冷やそうよ」

真道・蒼騎「あ……あ……あ……()()。;()()」

二人は土下座体制でアリシアから説教を受けている。

そしてアリシアの手に持たれた槌に雷が集まる。

真道「あ、アリシアさん!？」

蒼騎「そ、そんなのを喰らった俺達が!?!?!」

アリシア「大丈夫・・・少し痺れるけど、すぐ軽くなるはずだから」

真道「軽くなったと思ったたら天に召されたとか無しだよね!？」

アリシア「・・・」(チツ)

蒼騎「待て待て!?!?!それはマジで洒落れにならねんだぞ!!
舌打ちする程度のレベルじゃねえんだって!?!?!?!?!」

アリシア「うるさいなあ・・・さっきから喧嘩してたのは二人だもん。二人が悪いんだよ・・・」

そう言うとアリシアの手に持たれた槌にはチャージが終わった雷が二人に向けられた。

真道・蒼騎「ひ・・・」(1111)。(ヒイイイ!?!)

そしてアリシアの槌から放たれる雷の攻撃。

アリシア」

トル・ハンマー
総てを射抜く雷光

!!!」

アリシア「これで皆仲良し」

真道「あ……ああ……」

蒼騎「そ……そう……ですね……」

黒こげで煙を出している二人は何とか生きている。

??「大丈夫か？」

アリシア「え？」

そこに現れた一人の若い男性。

真道「だ、大丈夫……いつものこと……だ」

そう言っつて真道は立ち上がる。

蒼騎「慣れてるっつても……どうかしてるかな」

そう言っつて蒼騎もまた立ち上がる。

??「そうか。一応ここは公共の場なんだから、魔法を無闇に使うな。普通に周りの人たち見てるぞ」

そう言っつと3人は辺りを見渡す。

すると子供は泣いてそれを慰める親や、呆然と見ている人々。

?? 「取り敢えず俺に着いてこい。話しが出来る場所、案内してやる」

真道 「ちょっと待ってもらおうか?」

?? 「なんだ?」

真道 「私は真道創世。お前は?」

相良「俺は相良翔だ」

これが星屑の騎士と神話の3人との出会いだっ
た。

そして移動した4人が辿り着いたのはとある場所にあるプラネタリウム。

中にはいると天井に広がる無数の星。

蒼騎「すげえ……」

真道「美しいな……」

アリシア「綺麗いく！」

相良「ここ、俺の隠れ家だな。とにかく座れ。話しをしたいからさ」

そう言うと4人は席に座る。

アリシアを両サイドから真道と蒼騎が挟むように座る。

相良は心の中で『ほんとに仲いいな』と思っていたのは余談である。

相良「それで、俺は3人に聞きたい事がある」

そう。相良翔には目的があつて3人に声をかけた。

真道と蒼騎はそれを既に分かっていたかのように落ち着いて質問を待った。

相良「さっき、アリシアが使っていた魔法は何だ？ミッドでもなくベルカでもない・・・」

その質問には真道が答えた。

真道「私達の魔術は神話式って言ってな、私達独自の魔術になつてるんだ」

相良「神話式・・・か。知らないうちにまた変わった魔術がでてきたのか・・・」

真道「まあ世界はそんなものだろう？知らないうちに変化するものがある。それは外側だったり、内側だったり様々だが、変化は今もしっかり起こる」

相良「そうだな」

なんだかんだあつたが、真道と相良は相性が良いそうで、意気投合している。

相良「まあ何にせよ良かった。危険な奴らじゃないようで安心した」

蒼騎「お前、執務官か何かか？」

相良「いや、俺は暇な人だよ。善人では無く、悪人だろうけどね」

そう言うと相良は自虐気味に笑う。

アリシア「翔ちゃんが悪人なわけないと思うよ？」

相良「!？」

アリシアはそう言つとプラネタリウムの星を見上げながら言つ。

アリシア「だつて、ここにある全ての星よりも・・・翔ちゃんは輝いている。まるで、翔ちゃんが一つの光であるようにね。翔ちゃんがいなかったら星は輝かなくて、それほど翔ちゃん存在は大きいの」

相良「・・・ふ・・・そうか」

そう言つと相良の体は徐々に白い粒子の様になつてきた。

真道「!?!?な、何が起こつてるんだ!?!?」

相良「悪い。俺、この世界の人じゃないんだ。ただこの世界に来て、平和でいるか見たかつただけだ」

そう。相良翔はこのミッドチルダの住人ではない。

別の次元のミッドチルダに住んでいたのだが、気づくとこの世界に来ていたらしい。

その現実を受け止めて彼が考えたことはその世界を見ること。

そしてその中で出会つたのが真道たちだった。

相良「まあ、お前らがこの先“何か”を起こしてしまう可能性は否定できないけど、それを解決させるのも3人だ」

真道「ほう・・・お前は予知能力でもあるのか?」

相良「いや、3人を見てると・・・そう思えるんだよ。3人の神々が悪を滅する・・・それが理想的過ぎるからな」

真道「ほう・・・それじゃ、見せてやろう。神々（わたしたち）の創る世界をな」

そう言うと相良は光となって消えた。

相良「じゃな。平和な世界で待ってる」

そして機動六課に3人は戻る。

真道「ただいま。皆」

スバル「お帰りなさい！」

ティアナ「遅かったですね」

真道「ああ悪い悪い。ちよっとな」

スバル・ティアナ「？」

そう・・・3人は出会った。

別世界で、大きな事件を解決させるべく頑張る、誇り高き星屑の騎士と・・・

そして3人は、これから起こる事件に立ち向かうことになる。

初コラボ 番外編 星屑の騎士との出会い（後書き）

Rewrite「こ……更新に時間をかけすぎた……」

真道「何やってんだか……」

龍VS神 前編（前書き）

訓練などが続く中、一つの始まりが・・・

それは機動六課を、新たな事件に巻き込むこととなる。

Rewrite「更新かなり遅れましたが、こんな感じなのでよろしく願います。今回は遅くなってすみません」

龍VS神 前編

真道 Side

俺は普段と変わらず機動六課にお世話になっている。

そして今日はスバルとティアナの二人に俺の事を少し話している。

真道「えつとな、私がいたのは高町なのは達と変わらず地球なんだ。行ったことあるか？」

スバル「はい。任務で一度だけ行ったことがあります」

ティアナ「こことは違うことが多かったですね」

真道「確かに。私としては逆にこの世界に存在するいくつかのものが私の世界とは違ったと思ったよ。そもそも私達の世界には魔法がない・・・けれど平和ではない。こつちの世界は魔法があるし、執務官とかも存在する。だけど平和ではない。その点は変わらないんだって・・・そう思ったよ」

スバル・ティアナ「・・・」

スバルとティアナは高町なのは達から地球の戦争などについて聞い

たことがあるそうだ。

真道「今一度説明するけど、私達の世界は質量兵器を用いての戦いをする。魔法が存在しないから。その戦争は今も尚、今この瞬間も続いている。誰もが平和を望んで・・・な」

スバル「平和を望んでるのに・・・戦うんですか？」

その発言に私はスバルとティアナを真剣に見つめて言った。

真道「二人とも。これだけは覚えてくれ」

スバル・ティアナ「は、はい」

突如真剣な表情になったせい、二人はビクツと震える。

真道「“正義”ってのは人の数だけ存在するんだ。人の正義は一人一人違う。スバルとティアナの正義だって真の意味では違う。私の正義だって・・・この世の全ての正義がバラバラなんだ。そんな中でも一つの世界でバラバラの正義を繋ぎ合わせたんだ。そして固まった者同士は戦い合い、決着をつけてまた新たにくつつける。その繰り返し・・・ただその方法が・・・」

ティアナ「戦争・・・だって言うんですか・・・」

その答えに私は黙って頷いた。

ティアナ「そんな・・・その為だけに、人を殺すんですか！？殺せるんですか！？」

真道「それが“人”なんだ。よく覚えとけ」

冷たい声で私はそう言った。

スバル・ティアナ「・・・」

スバルとティアナは黙ってうつむく。

実際の戦場を・・・人が大量に死んで行く姿を見たことがないからな。

・・・本当はそれだけでも幸せだったりする。

真道「えっと、スバルやティアナは救助隊や執務官志望だったかな？」

スバル・ティアナ「はい」

静かにそう頷いた。

真道「スバルの場合、“救助”と言う事に関して絶対に見ないといけない現実があるんだ」

スバル「・・・」

真道「救助に100%の成功はない。だからスバルはいつか

『真道君!!!!!!』」

スバル「あ……なのはさん」

ティアナ「それに、ヴィータ副隊長」

二人が俺の私おうとしていたことを途中で遮ってこちらに怒りながら来た。

ヴィータ「てめえ、若い奴らに何言ってやがる!？」

真道「事実と現実を教えたただけだ。なんか問題でもあるのか？」

ヴィータ「問題大ありだ馬鹿やろう!!!」

なのは「真道君。“それは”まだ、二人には早い話しだと思っよ？」

二人の意見も確かにそうだ。

だが・・・

真道「甘ったれるな、時間が無いんだぞ!？今こうしている間に、誰が死んでると思ってんだ!？お前らも地球にいたんだからわかるだろう!!!!」

なのは「ヴィータ!？」

真道「お前らは、関係がない人間が死んでも何とも思わないのか!？関係がない人間が死ぬことはほっとして、大切な友人や仲間を優先するのか!？」

なのは「分かつてる・・・分かつてるよ」

真道「分かつてるなら、どうしてお前らは教えないんだ!？二人の“現実”を、しっかりと決めさせるのお前らの仕事じゃないのか!？」

ヴィータ「それでもあたしたちは、こいつらの夢を潰す気はねえ！」

潰す気は・・・だと・・・

真道「それは・・・今まで死んでいった人達を見てみぬふりを、スバル達にさせるってことか・・・スバル達は事実を知らなきゃいけないんだ！でなければ、一生後悔する。お前らはそれを見てみぬふりをするつもりか！？そしてそれを今知らないで死んでいった人たちを後悔してから知ると言うことは、今まで死んでいった・・・助からなかった人たちへの侮辱だ！」

なのは・ヴィータ「・・・」

だが、私の怒りをかき消すように緊急アラートは鳴る。

蒼騎「創世！」

アリシア「創ちゃん！」

二人が私達のもとにくる。

真道「二人とも・・・どうした？」

蒼騎「今鳴ってるアラートだけど、俺達を狙った奴だ！」

真道「何・・・なら、行くか」

そう言っつて私達3人は六課を出ていこうとした。

なのは「私達も行く！」

真道「では私達は先に行ってる」

そう言っつて私達は先に向かっていった。

アリシア「創ちゃん。一体なんの話してたの？」

移動中、アリシアは聞いてきた。

零「もそうだったようで私の方をみる。」

真道「・・・大切な彼女達に、彼女達の道を再確認させた・・・ただそれだけだ」

アリシア「・・・うん。そっか」

アリシアは何も言い返さずに、笑顔でそう言った。

それはアリシアの優しさだろうと思う。

真道「・・・ありがとな」

聞こえない声でそう言って私達は、向かう。

蒼騎「・・・いたぜ」

アリシア「久しぶりだね」

真道「・・・」

私達の前に現れたのは翠色の一体の龍。

それは、この世に存在するかも不明だと言われた・・・伝説。

そしてそれは地上に向かって緑色の炎を吐く。

吐かれた炎は地上の建物を破壊していった。

そして逃げ惑う人々。

まるでその光景は、突如平和な街に落とされた原爆。

一瞬で全てが絶望に満ちる。

だが、そこに現れた3体の神々。

ロキ「行くぜオーディン。トール」

トール「ロキも手を抜いちゃ駄目だよ」

オーディン「……構えろ。あの忌まわしき龍を裁くぞ」

ロキ・トール「分かってる」

そう言って神々^{わたし}は武器を構える。

ロキ「フェンリル！」

トール「ミヨルニル！」

オーディン「グラム！」

神々はそれぞれの武器を掲げる。

「 オーデイン・ロキ・トール」

セツト・アップ

「

そしてオーデインは刀。ロキは拳。トールは二挺拳銃を手に陣形をとる。

オーデイン「私とロキで攻める。トールは下がり、狙撃しながら大技の準備。行くぞ！」

ロキ「言われなくても!!！」

トール「分かった！」

そう言っただけで私とロキは龍に向かって走り出した。

龍はそれに気づくと私たちに向かった緑色の炎を吐いた。

私とロキはそれを左右に分かれて避ける。

ロキ「おおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!」

ロキは全身に蒼い魔力を放出、そして拳に集めて龍の懐に放った。

ロキ」

『フェンリス・ヴォルフ
神討つ拳狼の蒼槍』

「!」

オーディン」

『エクスカリバー
全てを斬り裂く刀』

「!!」

放たれた閃光は龍を包み込むが、煙からはほとんど無傷の龍が現れた。

オーデイン「ほう・・・久しぶりの強力な龍か・・・」

ロキ「やりがいがあるな」

トール「・・・多分、あれは弱点を狙わないと駄目だね」

私とロキの攻撃を見ていたトールの瞳には勝利への方程式が浮かびつつあるようだ。

その証拠に、トールの視ている世界は私達とは全く違う。

トールは元々視力が異常なまでに高い。まさに天から送られた才能と言わんばかり。

その視力の高さからトールは私達とは一切違う世界を視る。

例えば1キロ以上も先の世界の様子。

例えば微生物の皮膚の模様や形。

そして能力を使うと、未来まで視ることができる。

それほどの視力を持つツールは後衛から全てを視ていた。

ロキ「弱点がどこか分かるか？」

ツール「今の所、3つ見つけた。でも、まだどこかにあるかもだからもう少しお願い」

『もう少しお願い』とは様々な部分を攻撃してくれと言う意味だろう。

それを理解した私とロキは再び攻撃を始めた。

ロキ「フェンリル！」

そう言うとロキの拳は蒼き光となり、一本の剣となってロキの右手にもたれた。

これがロキのもつ『フェンリル』のもう一つの姿。

そして私も武器を変える。

オーディン「グラム……槍となりて、我に応えよ！」

そう言うと刀は姿を変えて紅き槍となった。

オーディン「勝負は……これからだ！」

龍VS神 後編(前書き)

機動六課に現れてから最初の戦い。

それを見る機動六課。

そして彼女は決断する。

龍VS神 後編

オーディン Side

オーディン「さて、ツールが決定打を見つけるまで、どこまで相手の体力を削れるか・・・」

ロキ「余裕だ。行くぜ！」

そう言っつてロキは先に切りかかる。

龍は全身を大きく回転させ、巨大な竜巻を発生させる。

ロキ「そいつはもう通用しねえぜ！！！」

そう言っつとロキの持つ刀は銀色の魔力を放出し、竜巻に突っ込む。

ロキ」

『フロッテ突き刺す正義の剣』

「!」

その一閃は龍を竜巻ごと貫いた。

竜巻はそのまま消滅、私が攻撃するチャンスが訪れた。

ロキ「今だオーデイン!!」

オーデイン「言われるまでもない！」

そう言っつて私は槍に魔力を込めると槍は三ツ又に変化して切っ先から紅き光が5つ放たれる。

オーデイン「

『破壊神の三ツ又槍』

」

5つの紅き閃光は龍を貫き、龍は苦しみの声をあげる。

オーデイン「トール！弱点は分かったか！？」

トール「うん！分かったよ！」

ロキ「よし…やるぜ…！」

そう言って私とロキは両サイドから龍を狙う。

正面からはツールが黄色い槌をだし、そこに雷の魔力を込める。

ツール「忌まわしき龍よ……あなたの未来は
『死』
と視た。私達『神』に裁かれる運命が……私には視えた」

そして私とロキでツールから言われた弱点に強力な一撃を叩き込む！

ロキ」

『ダイインスレイヴ
血を求める剣』

「

オーデイン」

『ガイ・ボルグ
心の臓を喰らうもの』

「

二つの技はまるで龍を喰らうつかの様に襲いかかった。

ぐちゃっとグロテスクなサウンドが響きわたり、龍は力尽きる様に地上に落下する。

ロキ・オーデイン「トール……！決める……！」

トール「うん……！」

そう言つてトールは止めと言わんばかりに雷を纏つた槌を龍に向けて大きく放つ。

トール」

『トールハンマー総てを射抜く雷光』

「!!」

その巨大な雷は龍を飲み込み、消滅させる。

トール「今宵、罪をまた一つ・・・神の領域で浄化されんことを・・・」

天に祈るようにそう言った。

そして私達は武装を解除する。

真道「・・・帰るか」

蒼騎「ああ」

アリシア「うん！」

普段と変わらない私達で、スバル達のもとへ向かっていくのだった。

スバル Side

スバル「凄い・・・」

私達はへりの中で創世さん達の戦いを見届けていました。

どの技も余りにも強力で、私たちがちっぽけに感じてしまうほど。

でも・・・創世さんはあんなに強いのに・・・世界を変えられずにいる・・・

だから・・・私たちに話したのかな・・・

創世さん達は確かに強い。多分、この世界で一番強いかもしれない。

けれどそれでも、世界を動かすことは出来ない。

でも……もし、私達が変われば……私達も一緒に変えていけば……変えられるんじゃないかなって思います。

私は……創世さんを追いかけてたい。

もしこの先 『死』 を見ることになっても、私は挫けない。

私はあの時、創世さんに命を助けられた時、私は無力だった。

正義感だけで、何も出来ない……無力な人だった。

そんな自分がとても嫌で……悔しくて悔しくて……

だから魔法の世界に入った。

お父さんにも・・・ギン姉にも反発された。

けれど私はもう、二度と同じ後悔をしなくなかったから。

なのは「スバル・・・大丈夫？」

心配そうな表情で私に声をかけてきたなのはさん。

スバル「大丈夫です！もう　　大丈夫です！」

なのは「・・・そう」

いつもの優しい笑顔でそう言ってくれた。

私の覚悟は出来た。

後は、私に出来ることをすればいいんだ。

そして私達は機動六課に戻り、私は創世さんと話しをした。

真道「決断、出来たか？」

スバル「はい！私は、夢を諦めません！」

そう。どんな現実がまっけてても、私は諦めない。

真道「うん。そうか・・・なら、私は君のその夢を護るよ」

そう言っけて私の頭を撫でてくれた。

スバル「えへへ／／／／／」

その温もりも、失いたくないから・・・現実から逃げないで、立ち向かおうと、私は決断した。

女神との出逢い (前書き)

一ヶ月ぶりの更新でした、すみません。

駄文なため、意識してくれると助かります。

それではどうぞ。

女神との出逢い

スバル Side

スバル「あの・・・創世さん」

真道「どうした、スバル？」

龍との戦いを終え、数日後、私は創世さんと話をした。

真道「それで、私に聞きたいことは？」

スバル「はい・・・その・・・」

凄く聞きづらい話し。

けれど、私は知りたい。

だって、私は前に進みたいから。

創世さんは、私達に現実を教えてくれた。

だから、だからこそ知りたい事がある。

スバル「創世さんは

護れなかった人が、いるんですか？」

真道「!？」

初めて見た・・・創世さんが動揺している姿。

冷静沈着でカッコイイ創世さんは、全身をまるで真冬の外にいる様な震え、表情は少し白っぽく、嫌なことがあったのだと一目で分か

る。

真道「……」

スバル「あ、あの……」

私は辛そうな表情の真道さんに声をかけるけど、言葉が続かない。

思い浮かばない。

なんて言っただけでは良いのか分からない。

スバル「ご、ごめんなさい。やっぱり良いです」

そう言っただけでは強引に話しを終わらせて席から立ち上がろうとした。

ギョッ

スバル「っ／＼／＼／＼／」

だけど、私は立ち上がろうとしたとき、創世さんに右手首を引っ張

られて後ろに倒れ、そのまま創世さんに抱きしめられた。

今の私は、背後から創世さんに抱きしめられている形になってる。

スバル「そ、創世さん／＼／＼／＼」

真道「ごめん・・・少し、このままでいさせてくれ」

スバル「え・・・」

それは、とても冷たく・・・寂しい声。

神様みたいに強い人の、弱々しい声。

全身は震え、抱きしめる力は、優しい創世さんの性格とは裏腹に強め。

痛いけど・・・私は抵抗しない。

むしろ、どこかで私は喜んでる。

心臓の鼓動が速度を増して、嬉しかった。

それは、住む世界が違う創世さんが、私なんかを求めてくれたから。

この満たされていく感情は・・・

真道「……っう……」

スバル「っ！？」

私はこの時、初めて

創世さんの涙を見た。

それからしばらくして、私は創世さんを私とティアの部屋に連れてきた。

ティアは書類整理があるため、ここにはいません。

私と創世さんは椅子に座って向き合って話しを続けた。

真道「先ほどはすまなかった。恥ずかしい姿を見せてしまった」

スバル「い、いえ。その・・・少し、驚きましたけど、大丈夫です」

真道「・・・ありがとう」

創世さんの顔から、笑顔が戻った。

そして創世さんは思い出すように天井を見ながら話し出した。

真道「護れなかった者・・・確かに存在する」

8年前。

これは、真道創世がまだ魔法の力を手に入れて少ししか経っていない頃。

彼は単独で“ある事件”の調査をしていた。

その調査中、ある女性を見つけた。

白銀の、腰の辺りまで伸びた髪に黄金色の瞳。

胸はある方ではないけど、スタイルの良い女性だった。

彼女は弱々しい顔で両手足・両手首を縛られ、ボロボロの体で拘束されていた。

拘束されていた場所には何もなく、ただ小さなビルの地下にいた。

私はすぐに彼女を救出し、外に出た。

だが、問題はそこからだった。

彼女と私を追ってくる、100をも超える敵。

モルモットにされたであろう獣達。

人造魔導士素体であろう者達。

そして質量兵器で作られた戦闘兵器。

様々なものが私達に襲いかかった。

真道「ぐうう！！」
『破壊神の三ツ又槍』
「！！！！」

何度も、何度も敵を粉碎し、私は意識を目覚めない彼女を連れて逃げ続けた。

そして私達は逃げきり、休んでいた。

真道「はあ、はあ、はあ」

グラム「大丈夫、オーデイン？」

真道「ああ。もう少し体力が欲しいよ」

デバイスのグラムとそんな話しをしていると、意識が目覚めなかった少女が目覚めます。

????「は……こ、この場所は……？」

真道「目覚めたか？」

????「は、はい……」

静かに感じるような声で、君は私に自己紹介をした。

ヒルデ「私の名前は『スクルド・ブリュンヒルデ』……ヒルデと

お呼びください」

真道「スクルド・・・ブリュンヒルデ・・・」

その二つの名は、かの有名なワルキューレの名だった。

オーデインの名を持つ彼にとって、この出会いは運命的だった。

真道「私は真道創世。またの名を、オーデイン」

ヒルデ「最高神・・・ですか」

グラム「私はグラム。以後お見知りおきを」

ヒルデ「ええ。よろしくね」

彼女はやせ細った体でそう言った。

真道「ヒルデ。体は大丈夫か？」

ヒルデ「ええ。あの・・・ですが・・・」

真道「？」

ヒルデ「私は・・・捕らえられていた筈なのに・・・」

真道「私が助けた。調べていた事件もあつたからな」

ヒルデ「そうですか。本当に、ありがとうございます」

その後、私とヒルデは行動を共にし、体力を回復させて共に事件の調査を開始した。

それは、ヒルデを捕らえた敵の情報なども込みでだ。

ヒルデも魔法を使うことが出来、事件の捜査で役立っていた。

戦う事は特にないが、それでも潜入調査は何度があった。

ヒルデ「貴方といるのは、とても楽しいですね」

真道「そう言ってもらえると助かるよ」

緊張感の抜けない捜査の中、ヒルデといる時間は、とても幸せだった。

緊張が解け、笑顔もたえない話し。

彼女は、私にとって大切な人の一人になった。

そう、これが私の人生の

初恋となった。

女神との出逢い (後書き)

こんな感じで始まった『最高神の過去編』。

高校受験があるので、少し更新が遅いですが、感想などお願いしますね！皆さん、頼りにしています！

未来予言の代償（前書き）

結局年越しに投稿してしまいましたね、ごめんなさい。

受験もあるので、そちらに専念していました。

受験が終わって一段落したら、例によって学校サボりつつの小説にはいろいろかかって思っています

未来予言の代償

真道 Side

私はヒルデと共に、様々な管理世界を行き来し、ヒルデを狙う者達を調べた。

真道「だがヒルデ。ヒルデを奴らが狙う理由、それが分からない」

ヒルデ「・・・そうね。教えたほうが良いようね」

私達は山奥の森で野宿しながら、焚き火の火を見つめながら話しをする。

ヒルデ「私の名前、『スクルド』は、未来を司る女神の名です。その力があつてか、私には『未来予知能力』・・・つまり、未来が視えるの」

真道「未来・・・か」

それはつまり、この世の運命をも視ることが出来るということ。

ヒルデ「彼らが求めているのはきつと、私のこの未来予知能力」

真道「・・・」

そう言われれば、確かに納得がいく。

未来が視れれば、現在で何をすれば、未来の災厄を防げるか分かるからな。

ヒルデ「でも……未来は、見てはダメなのです。いえ、それ以前に、未来予知に……意味なんてないんです」

真道「？」

視てはダメ……というのは？

彼女は辛そうな表情で言った。

ヒルデ「一度見た未来は変えられない”何故なら、一度見た時点でそれは未来ではなく、“過去”となるからです」

真道「なに……」

そう言われれば、確かにそうだと納得もいくが……まさか……

真道「ヒルデは……未来予知を、何度も使って、どのような未来を視た？」

ヒルデ「私は初めて使ってすぐに使用を禁止しました。ですが……私は、一つ……最悪な未来を視ました」

真道「それはなんだ!？」

ヒルデ「いつか、世界を絶望の果てに導くような、恐ろしい時がやってくる」

真道「なっ　　!？」

それは、信じたくない事実。

ヒルデが視た、確定された未来だ。

真道「何故・・・そんなことが起こるんだ!？」

ヒルデ「そこまでは見ていない。けれど、見えた世界は・・・」

世界は荒れ果て、人々は燃え盛る街を逃げ回る。

そこに迫る様々な色の閃光。

閃光は街に直撃して、巨大な爆発を起こし、人々を、そして、街と
言う存在そのものを消していく。

そしてその炎の中を、武器を持ちながらゆっくりと歩く・・・強大
な力。

それによって・・・世界は・・・

真道「それが、未来なのか・・・」

ヒルデ「ええ。私も、一生忘れられない・・・人生初の予知した未来」

真道「・・・」

正直、言葉を失う。

何が・・・未来で起きようとしているのか？

それは破滅で・・・どうやって止めればいいのか・・・それが分からない。

だが、一つだけ・・・分かっていることがある。

真道「私達がいっても・・・破滅は阻止できなかったわけだ」

ヒルデ「ええ。残念だけど・・・そういう事」

・・・どうしようもない、なんて思ってしまっ。

真道「・・・まあ、心の片隅にでも置いておくよ」

ヒルデ「え？」

真道「未来がどうなるうと、現在を諦めたら、希望も何もかも失う。奇跡は、最後まで希望を失わない人にやってくるんだからな」

かっこつけかもしれない。

けれど、俺は心の底から・・・そう思っている。

奇跡は起こると。

そして・・・未来を変えられると。

ヒルデ「・・・ふふ。あなたは、強いですね」

真道「違う。弱いからこそ、言葉で自らを奮い立たせているだけだ」

そう言って私は武器を持つ。

真道「さ、敵はまだまだ来る。さっさと倒して
う」
未来に行こ

ヒルデ「・・・ええ」

そう言って私は武器を手に、自らが進むべき道に迷わず進む。

だが、
この時

私は知らなかった。

ヒルデが視た未来は

まじりつあつたじや。

そしてそれが

私の、人生最大の後悔となることを。

最高神の護れなかった者（前書き）

今回はちょっと激しく戦ってみます。

・・・私、戦闘描写とかあんまり得意じゃないんだけど大丈夫かな？

最高神の護れなかった者

真道 Side

真道「それでヒルデ。ヒルデはこの問題が解決して・・・今後はどうするんだ？」

ヒルデ「・・・」

敵の襲撃を何度も受けながらも、私達は様々な管理世界に逃げた。

そんな旅の中、夢と言ってはなんだが、ヒルデに今後の話しを聞いてみた。

ヒルデ「私には、帰る場所なんてないから・・・一人で、どこか別の世界に旅でもしようかなって」

真道「帰る場所がないのか？」

ヒルデ「・・・うん。私、生まれてすぐ両親無くして、ずっと一人で生きてきたの。ストリートチルドレン・・・みたいな感じだったかな？でも・・・予知能力が使えるようになり、私に魔法の力が手に入っただけ・・・私は拉致されたの」

真道「・・・」

何故か、私は彼女と親近感が湧いた。

それは、両親をすぐに亡くしたということが私にもあるからだ。

私の場合は、この神の力があつたから、零二にも、アリシアにも巡り合えた。

この力は、出逢いのきっかけだったのだ。

だが、ヒルデは全く違う。

この力が、彼女を・・・苦しめてしまった。

未来が見えてしまう。絶望的な未来も、希望がある未来も・・・全て。

ヒルデ「ほんと、この力にはうんざりしてるんです。そして・・・自分にも」

真道「え？」

自分にもうんざりとは・・・どういうことだ？

ヒルデ「未来が見えるのに・・・変えられない。未来を・・・運命を視ることができるのに、それを変えられない！！それを、ただ待つことしかできない！！！！私は、女神の力があるのに・・・」

彼女は感極まって、大粒の涙を流し出した。

ヒルデ「私・・・神様失格だよ・・・誰も、誰も護れやしない！！」

何も変えられやしない!!!こんな無力な神様・・・私、ほんとに嫌なの・・・、未来を変えたいのに・・・無力な自分が・・・嫌いな」

両手で、涙を流している顔を抑え、うつむくヒルデ。

それは、力を持つ者の誰もが経験するであろう・・・無力感。

自分の無力が、誰かに迷惑をかけたか、誰かを苦しめたりする。

そうして後悔する時期は、誰にだって訪れる。

力があるのに・・・誰も護れなかった、救えなかった・・・なんてことは、よくあることで、誰もが当たってしまう壁でもある。

真道「ヒルデ。別にヒルデは、神様である必要はないのではないか？」

私は正直な想いを伝える。

真道「ヒルデは人であって、神様ではない。無理に背伸びして後悔しているだけなのかもしれない。この世に絶対なんてないんだ。だとしたら、少しでも絶対に近づける努力をするまでではないのか？」

ヒルデ「絶対に・・・近づける努力・・・」

私の言った言葉をそのまま言ったヒルデの瞳に、少しずつ光が戻る。

真道「努力は嘘をつかない・・・とまでは言い切れない。それこそ

絶対ではないからだ。だが、その絶対を打ち破ってこと私達“人”
と言うものは進化するのではないか？それを、その絶対を努力で打
ち破る。それこそ価値のある努力なのではないか？」

ヒルデ「価値のある・・・努力・・・」

ヒルデは、自分の両手を広げて、見つめる。

ヒルデ「・・・私の手に、どれほどの人を護れる力があるかな？」

そんな質問をしてきた。

真道「・・・無限だろうな。無限と言う数は、数字の限界だが、そ
れは零と同じようにプラスとマイナスが存在しない領域だ。ヒルデ
のその手には、零と言う意味の無限と数字の限界の無限の二つが存
在する。後は、どちらを上げるかだけだ。零と言う数字に、新たな
記号を与えるか、無限と言う数字を、新たな領域へ導くか・・・そ
れこそ、神様が到達出来なかった未知の領域にだ」

不思議と言葉が出てくる。

考えるよりも先に、言葉が出てくる。

それは、ヒルデを・・・こんな中途半端な場所で立ち止まって欲し
くないからだろう。

私は、彼女を・・・もっと自由で美しい未来に羽ばたかせたいのだ
ろう。

未来と言つ鎖に縛られず、今をしっかりと生きて欲しいんだ。

オーディン「スクルド」よ。汝、求めしは希望か？絶望か？」

私は声のトーンを変え、オーディンとしての私で彼女・・・スケル
ドの想いを聞く。

スクルド「・・・私は、求める・・・希望を、誰もが願ひし平和を・
・・・」

オーディン「汝の想い、しかと受け止めた。これより我は、最高神
の名のもとに、汝の求めし道の導き手となる」

そう言って私は、スクルドに右手を差し出す。

スクルド「・・・」

彼女はゆっくりと、考えながらその右手を伸ばしていく。

オーデイン・スクルド「っ!？」

だが、私達はその手を取り合うまもなく、前方に……強力な力の接近を感じた。

オーデイン「なんだ……この、今までにない殺気は!？」

スクルド「この・・・締め付けられるような感覚・・・来るよ!!」
そう言うと、地面から大きな地震を起こしながらその姿を表す、8
つの頭。

8つの頭と8本の尾を持つ、血の様に赤い瞳の大蛇が現れた。

オーデイン「あれは・・・ヤマタノオロチか!？」

だが、ヤマタノオロチは地球の日本に伝わる伝説・・・

何故この世界でヤマタノオロチが現れるのだ!？

スクルド「オーデイン。行くよ!」

オーデイン「分かっている。 グラム!」

グラム「はいつ!」

そう言うと、私の右手に蒼き刀が持たれる。

オーデイン「最初から、全力で参る!」

そうやって私は刀身に蒼き光を集結させ、放った。

オーディン

『エキスカリパー全てを斬り裂く刀』

』

蒼き閃光はまっすぐにヤマタノオロチに迫る。

だが、ヤマタノオロチの8頭はそれぞれ違う属性の閃光を放つ。

『水・氷・炎・雷・土・風・闇・光』

その8種類の閃光は私の一閃を撃ち破り、私に迫る。

オーデイン「くっ……ぐあっ!!!!!!」

そのまま迫る攻撃を直撃し、私は地面に叩きつけられる。

スクルド「オーデイン!!!」

スクルドは慌てて私の元に駆けつける。

オーデイン「問題ない。だが……なんて強さだ……」

8つの種族を使いこなす大蛇・・・まさに神話レベルの強さ。

今までの雑魚とは格が違うと言うことか。

だが・・・スクルドはやらせない。

オーデイン「グラム。その姿を剣に変えよ!!」

グラム「はい！」

そう言うと、グラムは蒼き刀から、黄金の柄をした西洋剣に変わった。

オーデイン「スクルド。援護を頼む」

スクルド「ええ。気を付けて」

そう言うと私は剣を手に、空を飛び、ヤマタノオロチに切りかけた。

スクルド
☐

☐
楯シルトシュバルデリンを割り裂く女
☐

スクルドは両手を左右に広げ、天に祈るように唱えると、天空より黄金の光が、ヤマタノオロチを槍の様に襲う。

その光は、ヤマタノオロチを覆い尽くすように爆発する。

スクルド「・・・っ!？」

だが、爆風から再び8つの種族の閃光を放とうとする。

オーデイン「グラム!行くぞ！」

グラム「はいつ!！」

そう言つて私は剣に黄金の魔力を集結させ、離れた距離のヤマタノオロチに向かつて一閃を放つ。

真道
』

』
黄金色の聖約
テイルウイング
』

!!
』

その一閃は、距離と言う概念を切り裂き、20m程の距離にいるヤマタノオロチの頭部を切り裂く。

オーデイン「つく……」

だが、切り裂いた後、私の剣にヒビが入る。

グラム「か……硬い」

オーデイン「奴の強度も、並みではないというわけか……」

今の斬撃は、あと1発しかいけない。

それでケリをつけなければ……

スクルド「オーデイン。私が囿になるから、その隙に大技を！」

オーデイン「なっ……待て！それは危険だ！」

突如出したスクルドの提案に、私は猛反発する。

オーデイン「そもそも、スクルドを逃がすための戦い。ここでスク

ルド本人を危険に晒すわけには」

スクルド「でも、私達が生き残るには、それしかないの!!」

オーデイン「違う!まだ・・・まだあるはずだ!!」

そう・・・スクルドを危険に晒さずに済ます方法が・・・

スクルド「ううん。もう、十分だよ」

オーデイン「っ……」

スクルドは、まるで自らの死を知っているかのように……自らの死を覚悟しているような笑でそう言った。

スクルド「オーデイン……いいえ。創世さんに助けられなかったら、私はここにいなかった。そして創世さんが、私に色々教えてくれた。私、ほんとに嬉しかった。独りぼっちだったから……」

オーデイン「……だが、だからといって、まだ方法g『これしか生き残れないの!!!』っ!？」

スクルド「あなたには……生きて欲しいの。あなたには、未来を変える力があるって信じてるから」

未来を……変える力……

スクルド「私には出来ないから……だから、あなたに変えて欲しいの。青空と綺麗な花が見れる、この世界を
破滅させては
いけない。だから
お願いしますね」

オーデイン「……何かあっても、必ず助ける。死なせはしない」

そう言うと、スクルドは嬉しそうに微笑み、ヤマタノオロチをひきつけるために走り出した。

スクルド「では“未来で待ってます”」

スクルド
『

『
楯シルトシュバルデリンを割り裂く女
』

』

天から黄金の光の槍を出し、ヤマタノオロチに当てて注意を引く。

スクルド「こつちよ!!!!!!」

その間、私は剣に力を集結させる。

オーディン「『ニールングの指環』」

そう言うと、私の全身を仄かに黄金の光が包む。

オーディン「 第1日『ワルキューレ』」

そう言うと、私の全身の怪我が全て癒えた。

オーディン

『穢れなき炎の聖剣』
レーヴァテイン

!!!

刹那、ヤマタノオロチの存在そのものを、黄金の炎が包み込む。

視界は黄金に染まり、敗北と言つ言葉すらをも切り裂く。

そして光が去った時、私の前方180°の大地は削れ、奈落の底と変化していた。

真道「……はあ、はあ、はあ……」

私の全身から黄金の光は消え、普段の私となった。

武器も冷却状態に入り、待機モードで蒸気を出していた。

私はその場に倒れたいところだが、スクルドが気になる。

真道「っ……スクルド……スクルド!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

スクルドが見つからない。

先程の攻撃の時……離れていたはずなのに……

真道「スクルド……どこだ……スクルド!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

だが、どんなに叫んでもスクルドの声は聞こえない。

真道「スクルド・・・っ」

今、私は彼女がなぜ自らを犠牲にしたのか分かった気がした。

真道「スクルド・・・お前、自らの死すらも
予知していたの
だな」

未来で待っている・・・それは、いついつとだったのだろう。

真道「・・・はは・・・はは・・・」

瞳から、涙が溢れる。

眼前に広がるのは、
自らの攻撃で生み出した

消滅の跡。

私は

後悔した。

スクルドを守ると言っておきながら

スクルドを殺したのは

スクルドを守れなかったのは

全て

全て

真道「あああああああああああああああああああああああ
!」

全部

私のせいだったのだ。

そう、スクルドは自らの死を予知、そして殺した相手は
だったのだ。

私

最高神の護れなかった者（後書き）

これで話は終わり、次回はスバルとの話しに入ります。

そして今度、コラボをやりまゝす！

思い出に変わらないために（前書き）

寒いね〜年越したのに、年玉貰えなかったよぉ〜（、；、；、）

今年からアルバイト出来るからって家族も鬼畜だお（；・（

思い出に変わらないために

真道 Side

スバル「・・・」

スバルは、言葉が出ないようだった。

無理もない。まだ15歳だ。

重すぎる話だったはずだ。

スバル本人が望んだ話にしても・・・ここは自重するべきだったか。

真道「すまない。話が重すぎたな」

スバル「い、いえっ！私が聞きたかったから・・・むしろ、私の方こそごめんなさい」

真道「謝る必要はない。もう8年以上経つ話した。今となれば一つの思い出なのだから」

スバル「思い出・・・ですか？」

スバルは目尻に溜まる涙を拭いながらそう聞く。

真道「ああ。記憶は、遠い順番から思い出に変わっていくものだ」

スバル「それで・・・その後は？」

それでもスバルは最後まで話を聞こうとした。

それは、スバル自身の決断でもあるのだろう。

真道「特にこれと言って大きなことはなかった。戦いの後、私は零二やアリシアのもとに帰って、平和に過ごしていた。予知の日はまだだがな」

スバル「・・・そう、でしたか」

スバルは暗い表情で俯く。

やはり重すぎる話だった。

とにかく話題を変えようと、私は周囲を見渡す。

すると時計の針が既に夜の7時を指していた。

真道「もうこの時間か・・・ならば、夕食に向かおう。腹が減っては戦はできぬだ」

スバル「・・・はい」

そう言って私は、半ば強引にスバルを導いた。

これしか・・・浮かばなかったのだ。

スバル「・・・」

食堂についても、スバルは俯いたままだった。

既にほかの局員は食事を終えて、食堂には私とスバルの2名だけが・・・ぼつんといた。

テーブルの上には、カルボナーラやシチューなどが置かれている。いつもの食事だが・・・スバルは一向に手をつけようとしなない。

真道「スバル。食事の時間は、全てから解放されるべきだ。今は、食事を楽しもうじゃないか？」

そう言つてスバルにスプーンを渡す。

スバル「・・・はい」

そう言つてスバルはシチューに手をつけるが、その速度はほんとに遅いものだった。

私は対面で座るのを止め、スバルの左側に座つて、スバルの顔をのぞき込む。

スバル「・・・」

真道「スバル。スバルは・・・何が怖い？自分の未来か？人の死か？それとも、未来の破滅か？」

私は、それが知りたい。

それは、スバルの想いを、受け止めてあげたいから。

今度は・・・スクルドの様な結果を生みたくないから。

スバル「・・・私、怖いです」

真道「っ!？」

スバルは突如、俺に抱きついてきた。

ぎゅっと・・・力を込めて抱きしめる。

それは、俺を離さない様に・・・別れたくないかのように・・・

スバル「私……大好きな創世さんが、いつかいなくなるのが……
怖いんです」

真道「っ……っ」

それは、彼女の告白だった。

スバル「大好きだから……だから好きな人と……離れたくない
です……」

大粒の涙が私の服に溢れていく。

私は、戸惑った。

私の事が好き？

私の何を好きになったのだ？

護れなかった……そんな無力な私の、何を好きになったというの
だ？

今の話しを聞いて、それでも私を好きと言う、彼女の気持ちがない。

真道「何故・・・私なのだ？」

スバル「・・・」

私達は、一度食事を終え、私の部屋にスバルを招いて、そこで話を続けた。

スバルは私の部屋で正座で座り、私は丸い小さなテーブルにお茶を置いて話しを聞く。

スバル「最初は、一目惚れでした。あの事故の時、私を助けてくれた・・・創世さんの姿がかっこよくて、ヒーローだって思って・・・思い出すとドキドキして、これはきっと恋だよねって・・・ティアにも相談して・・・」

真道「そ、そうか・・・」

何故か照れくさくなり、私は髪を弄ってしまふ。

スバル「それで・・・創世さんと再会できた時は、本当に嬉しくて・
・夜も眠れないんじゃないかって興奮しちゃって・・・。。でも、
創世さんはその間にも・・・苦しい日々を送っていて・・・そして
いつ死ぬのかも分からない現実に生きてる創世さんを知って・・・
急に怖くなって・・・」

再びスバルは、泣き出す。

スバル「早くしないと・・・創世さんがいなくなっちゃうんじゃない
かって・・・だから、言わないで後悔したくないから・・・好き
だって、言おうとしたんです」

真道「スバル・・・」

辛いのだろう。

そしてスバルは、私を見つめて・・・純粋な瞳で言う。

スバル「私は、創世さんが好きです。私と
さい」 付き合ってください

真道「・・・」

まっすぐな瞳。

なんの迷いもなく、ただ伝えたい気持ちでいっぱいいなのだらう。

私は、悪い気はしなかった。

むしろ、心が熱くなってくるのを感じる。

嬉しかった。

スバルが、私を好きになってくれたことが。

真道「スバル……」

スバル「はい」

ならば、私も正直な想いで答えてあげねばならない。

スクルド……すまない。

私は、彼女を好きになってしまったようだ。

彼女を、大切にしていきたいのだ。

恨みたいのなら、好きだけ恨んで欲しい。

悪いのは私だ。

真道「私は・・・スバルの事が

そ・・・よろしく願います」

好きだ。だから、こちら」

スクルドを失った。

ならば、次は同じ結果を生まないようにすればいい。

スバルと言う大切な存在が生まれたのなら・・・

今度は、スバルを危険に晒さない方法を考えるのだ。

スバル「創世さん・・・大好きです」

真道「私もだ。スバル」

そう言って私はスバルを抱きしめ
け

お互いの顔を徐々に近づ

スバル「ん……あ……んん」

二人の影は

重なった。

思い出に変わらないために（後書き）

Rewrite「よしっ！ハッピーエンドだ！これでこの小説は終
り」

真道「終わらすな」

Rewrite「うう・・・今日は成人式なのにい・・・」

蒼騎「関係ねえだろ！？お前まだ15歳だろ！？」

Rewrite「・・・ですね」

Rewrite「次回から新章突入？・・・どうなるかは私の文才
に任せます」

アリシア「期待しないでね」

真道・蒼騎「アリシアが言うなら・・・期待しない」「」

Rewrite「ウザイッ！」

幸せな彼を見て（前書き）

受験の気晴らしに小説・・・最高だね

受験の事を忘れちゃいそう・・・

真道「それはダメだろ」

蒼騎「受験舐めんなよ」

アリシア「そうだよ！」

真道・蒼騎「特にアリシア」

アリシア「そうだよ・・・って、それどういふこと!?!」

アリシアちゃんですからからねWWW

幸せな彼を見て

蒼騎 Side

蒼騎・アリシア「……」

朝の朝食、例によって俺とアリシアで喧嘩をしているはずなのだが、今日は違った。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

パクパクパクパクッ！！

あ、サウンドだけでは分からないと思うから説明すると、現在俺の隣にアリシア。

正面の席にはスバルと創世が隣同士で座って朝食を食べているのだが……

真道「美味しいか？」

スバル「ひゃい！」

創世は右手にフォーク、左手にスプーンを持ち、テーブルに置かれている料理を目にもとまらぬ速度ですくってスバルの口に入れていく。

だけど、あんなに幸せそうな表情をする創世を見るのは……8年ぶりだな。

8年前、創世が行方不明になったことがあった。

だが、しばらくして帰ってきた。

その姿は……まるで抜け殻だった。

心ここにあらずで、瞳からは光を失い・・・大雨に打たれて帰ってきたのではないかと言っほどのボロボロさ。

俺やアリシアが声をかけても、俯いたままで返事もなく・・・ほんとに生きているのかさえ疑問に思うほどの状態だった。

それからしばらくして、なんとか復活してきたのだが・・・その傷は後遺症の様に残り、あいつはいつからか、幸せそうに笑うことが無くなった。

だが・・・

真道「む・・・スバル。少々食べ過ぎなのでは？」

スバル「良いんです！その分消費しますから！」

真道「そうか。ならばしっかりと食べねばな！」

スバル「はい！！！」

あんなに幸せそうな表情・・・出来るんだな。

アリシア「良かったね」

蒼騎「ああ。あいつが元気になったのは・・・紛れも無く、スバルのおかげだ」

アリシア「うん」

神の名を持つと言う責任感からか、俺たちの事も神の名で呼ぶことが増えていた。

それは、過去を忘れないためか、自らが『真道』・・・真の道へ進める者と言う意味が嫌いになったのからのどちらかだろう。

そんな彼が今・・・すごく幸せそうだ。

スバル「ふはあ・・・お腹いっぱい」

真道「よく食べたな」

そう言いながらスバルの頭を撫でる創世。

まるで犬に餌をあげた飼い主だな（；^ ^）

ま、こいつが元気になってもらわなきゃ、俺も喧嘩のしがいがねえしな。

アリシア Side

朝食を終えた私は零ちゃんと離れ、スウちゃんスバルと創ちゃんの二人の跡をコソコソと追いかけていた。

アリシア「……あれ？はやてちゃん？」

はやて「（ ）ノ オウツ」

え……何その態度？

見ると黒いサングラスに顴の深い帽子をかぶっていると云う、どうみても尾行している怪しい人になっている。

はやて「あの二人の仲がええから、ちよお後を追いかけてきたんや」
アリシア「た、楽しいそうですね」

はやて「アリシアちゃんは楽しくないんか？」

その質問に、私は少し真面目に答えた。

アリシア「・・・今はまだ、みてて楽しいなんて思わないな。もう少し・・・二人を見て判断したいんだ」

そう。8年前、創ちゃんがボロボロで帰ってきた時・・・あの時の姿を思い出すと、今の光景も心無しか苦痛に見えてしまう。

あの日の事、私と零ちゃんは知らない。

けれど、何かを失ったのだと・・・それは察することができた。

それが辛くて・・・私は、とにかく創ちゃんが笑顔になれる努力をいっぱいした。

料理に挑戦したり、家事に挑戦したり、創ちゃんの相談相手になつてあげたり・・・

だって・・・あの頃、普段していた零ちゃんと創ちゃんの喧嘩・・・見るのも辛かったから・・・

回想　　く8年前のあの日からしばらくしてく

蒼騎「おい創世！いい加減にしろ！！いつまでそんな抜け殻の状態
でいる気だ！」

アリシア「ちょ、ちょっと零ちゃん・・・」

しばらくしても、創ちゃんは抜け殻の状態が続き、零ちゃんもイラ

イラしていた。

そしてついに我慢の限界で、怒ってしまったのです。

でもそれは、創ちゃんの事を心配しているからで、決していい加減な気持ちになつたわけじゃない。

それは、二人の親友同士でいる姿を見れば分かった。

蒼騎「てめえに何があつたかなんて分かんねえ。でもな、周りがど
んだけ心配してると思つてんだよ！アリシアも、含めて・・・てめ
えそんな抜け殻でいるなんてふざけた状態でいるんじゃないよ！！
！」

そう言つて零ちゃんは創ちゃんの胸ぐらを掴んで睨みつけた。

真道「・・・っせえよ」

蒼騎「ああ？」

静かに、創ちゃんが口を開き・・・そして、

真道「うっせえよ！！！！何も知らねえで言いたいこと言いまく
つて、てめえこそいい加減にしろつてんだ！！！！」

怒鳴り散らすように声を荒らげた。

蒼騎「何も知らねえに決まつてんだろ！！口で言わねえで悟れつて

真道「アリシア……」

アリシア「一人で……抱え込まないでよ……私達
でしょ？」

家族

真道「っ!?!?……そう、だったな」

そう言っつて創ちゃんを私を抱きしめ返して……

真道「それじゃ・・・私の弱い部分、少しだけみててくれ」

アリシア「うん。ずっと・・・ずっとみてあげることから」

そう言って、創ちゃんは・・・叫ぶように泣いた。

苦しみを放つように。

後悔に苦しむ人の叫び・・・涙・・・

何があつたかは分からないけど、辛かったのは変わりなくて・・・

現在。

アリシア「……あ」

はやて「なんや……」

私とはやてちゃんがついたのは、六課の裏。

そこで創ちゃんとスウちゃんは、二人仲良く訓練をしていました。

真道「どうしたスバル！もつと全力で来い！！」

スバル「はいっ！！！！」

そう言つてスウちゃんは拳をぶつける。

創ちゃんはそれを受け止めてあげる。

真道「いいぞ！もつと頑張れ！！」

スバル「はいつ！！」

はやて「・・・なんや、私達が求めてるような、そんな面白いこと
はないみたいやな」

そう言つてはやてちゃんは静かに、その場を後にした。

アリシア「・・・」

私はしばし、その光景を見ることにした。

真道 Side

真道「よしっ！来い！！」

スバル「はいつ！！！！」

そう言つてスバルは青い魔力を小さな球体の様に集め、私に放つた。

スバル「デイバイン・・・バスター！！！！」

真道「くっ・・・」

私はそれ両腕をクロスさせて防ぐが、地面を削りながら10m程押される。

真道「つつ・・・良い威力だ」

スバル「んっ／＼／＼／」

そしてスバルの唇を奪う。

スバル「ちょ、創世さん／＼／／」

真道「どうした？嫌だったか？」

スバル「そ、そうじゃなくて・・・んむ／＼／／／」

私は再び不意をつくようにスバルの唇を奪う。

スバル「あ、あの／＼／＼／恥ずかしいです／＼／／／」

真道「良いだろう？私達は恋人同士なのだから」

スバル「くくくくくっ／＼／＼／／／／／／」

スバルの顔が紅潮して爆発寸前だ。

スバル「う／＼／＼／はう／＼／＼／／／／」

でも・・・それでいいと思った。

正直な想いを伝えられるから。

後悔しないために・・・私は、好きな人に好きだと良い続けたい。

二度と・・・後悔しないために。

真道「それではスバル。昼食に向かおう」

スバル「は、はいっ／＼／＼／＼」

そうやって私とスバルは、手を繋いで共に食堂に向かうのだった。

アリシア Side

アリシア「っ／／／／／／／／／／」

ちょ．．．創ちゃんってあんなに大胆だったっけ!?

わ、私、創ちゃんをあんな風に育てた覚えはないよ! (別に育ててないけど)

でも．．．

アリシア「．．．うん。大丈夫そうだね」

もう、何も心配はいらないみたい。

好きな人と一緒にいて．．．その人に好きだって伝えていられるのだから．．．

・
・
・
あれ
・
・
なんで
だろ？

アリシア「なんでこんなに・・・モヤモヤするんだろう・・・」

私は自分の胸にあるモヤモヤの原因が分からないまま一日が終わった。

なんで二人を見てると・・・ううん。創ちゃんを見てると・・・モヤモヤするんだろ？

コロボ神話 紅き修羅と最高神 〔前編〕(前書き)

今回はI K A先輩とよくコロボる白さんの作品と2部作に分けてコロボします！

I K A先輩とちよいちよいm a i iしながら確認をとってやっています。

真道 Side

真道「・・・え？」

なんの脈絡もないも無い入り方で、本当に申し訳ないと思っている。

取り敢えず私は、別世界へ飛ばされたらしい。

いや、何がなんだか神様の名を持つ私ですら理解不能なのだが・・・
全知全能って訳ではないので眼前に広がる状況を未だ受け止められ
ずにいる。

別次元に飛ばされ、私の眼前に広がるのは、絶望だった。

いきなり目の前に様々な伝説上の生物が暴れているのだ。

例えば・・・そう。

ドラゴンとか・・・ユニコーンとか・・・あ、別にガンム系の話
しではなく、今の私の現実だ。

大地は荒れ果て、削れ、地割れの痕の量は・・・この世界に人類の
存在が無くなったようだった。

天変地異が起きた痕と言えば良いか、近くの富士山程の大きさの山
は大噴火を起こし・・・

真道「・・・私は・・・ここで何をすればいいのだ・・・」

自分の存在が、本当に小さく感じた。

なんて・・・なんて自分は小さき存在なのだろうと・・・

・・・とにかく、ここから離れて、人がいる場所を見つけるしかないか。

真道「グラム。付近に生命反応は？」

グラム「生命反応は、ここから北に行くとこの場所と環境が一変して平和な街があります。」

真道「そうか・・・なら、そこに急ごう」

そう言って私は自身の最高速度でその場を離れていくのだった。

しばらく北に進むと、グラムの情報通り、小さな街があった。

先ほどのような場所とは、天国と地獄の様な差がある場所。

街は賑わっており、小さな街にしてはいい場所だった。

私は街を歩く女性に先ほどの場所について聞いた。

真道「先ほど、南の方が荒れ果てていた。何か知っているか？」

女性「あなた・・・あの場所に言ってきたの？」

真道「まあな」

女性「驚いた。あの場所に向かって、生きて帰ってくる人なんて絶対にいないと言われていたのに」

その人は相当驚いたらしく、私に詳しく教えてくれた。

女性「あの場所は『人類の終末』と呼ばれている、伝説上の生物のみ生息する場所。人が踏みは入れれば生きて帰れない。私達の祖先は、あの場所から何度も何度も逃げて、その結果、現在のこの街が安全で豊かに生活出来る場所になったの」

真道「なるほど……。感謝する」

そう言っつて私はその街をしばらくうろついた。

特にこの街がどんなものなのかを自分の目で確認するためである。

真道「……」

私はこの街の人々を見ながら、思うことがあった。

このままでいいのか？

いつ再び狙われるかもわからないこの地で生活するのは、あまりに

も辛いのではないか？

・・・あの生物達の存在で苦しめられるのなら、私が・・・

真道「・・・」

私は決断し、街を離れ・・・再び、あの場所へ向かった。

真道「・・・グラム。行くぞ」

グラム「はい」

そう言うと、グラムはその形状を刀と変え、私は蒼き光を刀身に纏わせて
放った。

真道「

『エクスカリバー全てを斬り裂く刀』

！！』

蒼き閃光は一直線にその世界に広がる伝説の生物を包み込み、消滅させる。

その光景を視た周囲の生物が、私を睨む。

真道「長期戦になりそうだ。だが、負けられない」

そう言って再び蒼き光を纏わせて、閃光を放つ。

真道『

『全てを斬り裂く刀』
エクスカリバー

！！！』

蒼き閃光は再び生物を包み込む。

だが、攻撃を受けなかった生物が上空から迫る。

真道「はあっ！！！！」

私は上空に飛びながらその勢いで何体もの生物を切り裂く。

切り裂かれた生物は地上に着く前に蒼き光に包まれて消滅していった。

だが、その時、上空から赤い龍と白い龍が私に炎を吐く。

真道「くっ！」

私は瞬時に対応し、紙一重で避ける。

真道「しまっ……ぐあっ！！！」

だが、避けた場所にはその龍達の尻尾があり、尻尾で地面に叩きつけられた。

真道「ぐっ……」

グラム「大丈夫ですか！？」

真道「問題ない。この程度……かすり傷だ！」

口についた血を手の甲で拭き取り、刀を持って言う。

真道「槍になれ。そしてやるぞ！」

グラム「はい！」

そう言うとグラムの姿は紅き槍へと変化する。

そして真っ直ぐに迫る2頭の龍に真正面から突っ込む。

真道』

『稲妻貫く灼熱の槍』
ブリューナク

!!!』

その瞬間、紅き二つの閃光が2頭の龍を貫く。

貫かれた龍は地上に叩きつけられ、消滅する。

だが、まだまだ敵は出てくる。

真道「これではきりがない・・・」

そう思った為、私は大技で一掃しようと考えてる。

グラム「ならば、力を開放したほうが・・・」

真道「そうだな。・・・やるぞ！」

そう言って、私は左手を前方にだす。

すると薬指が小さく光る。

真道 『

『ニーベルングの指環』

』

そう言つと、左薬指に、金色に光る指輪が付けられる。

真道 『

第1日 『ワルキューレ』

』

そう言うと、私の全身の傷は癒え、全身が黄金に光っていく。

真道「さあ・・・行くぞ!!!!!!」

そう言いながら、槍に膨大な魔力を込め、前方に迫る50を超える
神獣に向かって放つ。

真道 『

破壊神の三ツ又槍』

』

槍は三ツ又へと変化し、膨大な力は目の前に現れる敵全てを包み込み、更には遠くまで光が伸び、前方の敵は全て飲み込まれた。

真道 「次だ！」

そう言って槍を姿を西洋剣に変え、黄金の光を刀身に込めて放つ。

真道 ㊦

㊦ テイルウイング
黄金色の聖約 ㊦

㊦

その一閃は距離の概念そのものを切り裂き、前方の全てを切り裂き、前方の敵全ては消滅する。

真道「よし・・・っ」

私の体は少しぐらつく。

グラム「無茶をしすぎです！いくら能力の発動があっても、体が持ちません！」

真道「・・・いや、これくらいの無茶は仕方ないさ。・・・っ!？」

だが、私はその隙を突かれ、背後から角と羽を生やした馬につかれて飛ばされる。

真道「ぐああああっ！！！！！！！」

背中が角に突かれた痕が残る。

全身から血が流れる・・・

人の血・・・流れるから気づく。

私は無力だ。

覇龍！！！！！

真道「！？」

私の周囲を覆う敵を、一体の龍が消してゆく。

そして、私の前に、一人の男の姿が現れる。

真道「お前は・・・」

赤く染まった髪、それでいて大人と呼べる身長ではないにもかかわらず、大人の風格をみせるその姿。

前方の敵に放つ殺気は、多くの修羅場や戦場を生き抜いた証にも感じる。

??「見させてもらった。お前の戦い」

そう言いながら、武器を持たない彼は、拳を構える。

??「最高神なんて名乗るから、人との違いを見極めたかったが・・・それは必要なかったようだ。お前は人で・・・最高神は飾りだ」

真道「っ・・・」

事実だと、私の心も言っている。

だからこそ・・・私は思う。

真道「ならば・・・人としての全力、ここで見せてやるっ」

そう言うと彼は嬉しさなのか、笑を零し・・・

??「期待してるぞ」

そう言うと彼は私の背中に背中を合せ、私の背後の敵を一掃しだす。

?? 「後ろは任せろ。前は頼むぞ」

真道 「その前に・・・私は真道創世。お前は？」

龍牙 「真崎龍牙。またの名を
紅き修羅」

これが、紅き修羅と最高神の出逢いと、二人が作り出す一つの神話となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7508w/>

魔法少女リリカルなのはStrikers～誰もが願いし平和～

2012年1月14日10時45分発行